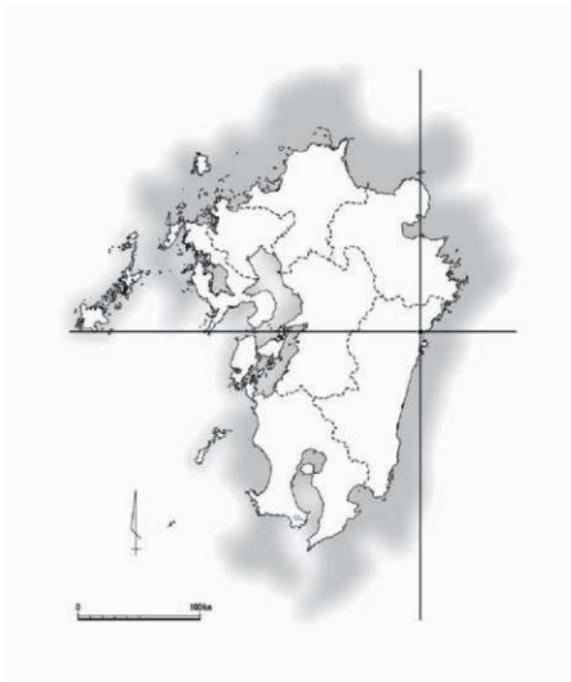


延岡市所在

のべおかじょうない

延岡城内遺跡

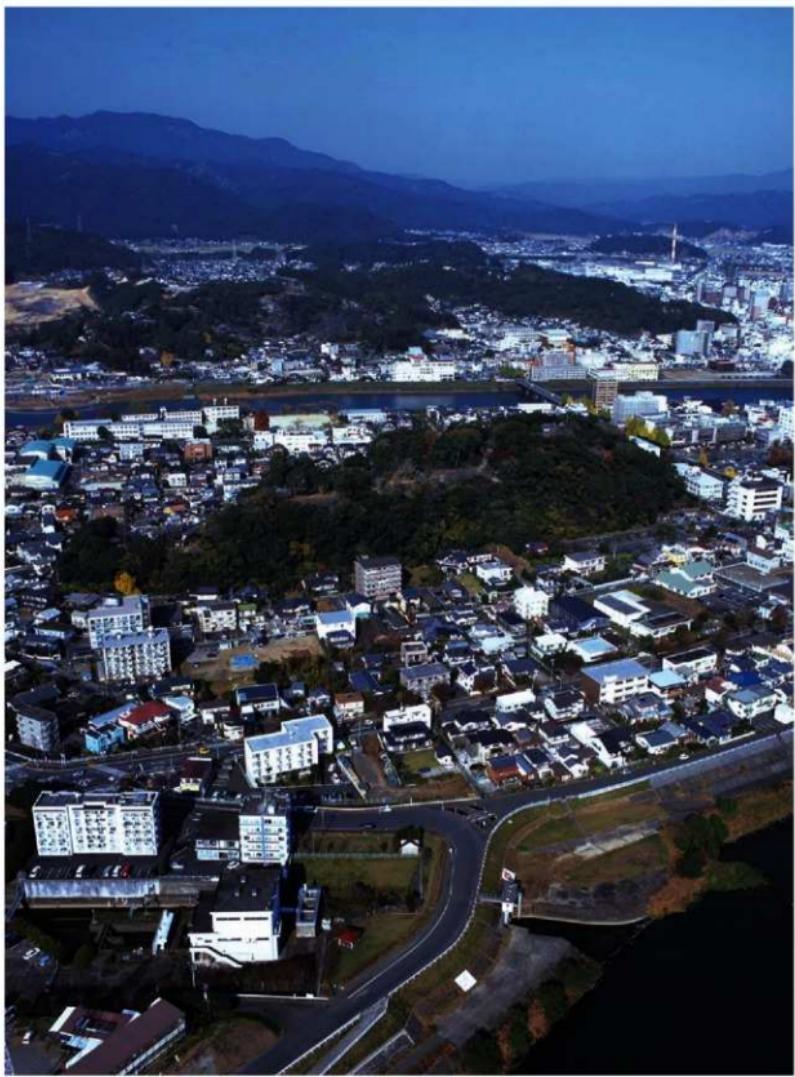
延岡拘置支所新営工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書



2012

宮崎県埋蔵文化財センター

卷頭図版 1



調査地遠景
(五ヶ瀬川、大瀬川を望む、中心に見えるのは延岡城跡) (現城山公園)

卷頭図版 2



延岡城内遺跡出土遺物

序 文

宮崎県教育委員会は、延岡拘置支所新営工事に伴う埋蔵文化財の発掘調査を、平成22年10月18日から12月22日までおこないました。本書は、その発掘調査報告書です。本書に掲載した延岡城内遺跡は、延岡城のふもとに広がる城下町にあたり、絵図などから、延岡藩藩士の屋敷地の一画として利用されていたと考えられます。

今回の調査では、溝状遺構、畝状遺構や土坑、柱穴が見つかりました。さらに調査区の中央からは落ち込みが見つかり、陶磁器類や金属製品など多くの遺物が出土しました。これらの遺構や遺物は、当時の生活を知るうえで重要な手がかりになります。ここに報告する内容は、今後、当地域の歴史を解明する上で貴重な資料になるものと考えられます。

こうした埋蔵文化財は、後世に引き継ぐべき大切な財産です。今回の調査で出土した遺物や記録物が多くの人々に大切にされることを願います。

また、本書が学術資料となるだけでなく、学校教育や生涯学習の場などで活用され、埋蔵文化財保護に対する理解の一助になれば幸いです。

最後に、発掘調査及び報告書作成のために、多大なご協力をいただいた方々をはじめ、関係各位に深く感謝し、厚くお礼申し上げます。

平成24年3月

宮崎県埋蔵文化財センター
所長 森 隆茂

例　言

- 1 本書は延岡拘置支所新営工事に伴い宮崎県教育委員会が実施した、宮崎県延岡市桜小路338－7に所在する、延岡城内遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は宮崎刑務所の依頼を受け、宮崎県教育委員会が主体となり宮崎県埋蔵文化財センターが実施した。
- 3 発掘調査は、調査第二課第四担当主事太田真理子、同主査黒木俊彦が行った。現地での実測、写真等の記録は、太田、黒木、橋本憲二（宮崎県埋蔵文化財センター）が、発掘作業員の協力を得て作成した。
- 4 整理作業は、宮崎県埋蔵文化財センターで太田及び黒木が整理作業員の補助を得て行った。実測図、トレース図作成及び写真合成を行うにあたり、一部を委託した。
- 5 発掘調査及び整理作業を行うにあたり、以下の作業を委託した。

発掘調査

- ・調査区掘削及び復旧業務・・・株式会社カネトミ
- ・空中写真撮影・・・・・・・有限会社ふじた
- ・測量業務・・・・・・・株式会社東九州コンサルタント

整理作業

- ・銅製品保存処置・・・・・・・吉田生物研究所
- ・自然科学分析・・・・・・・パリノ・サーヴェイ株式会社
- ・実測図作成・・・・・・・株式会社アーキジオ

- 6 本書の執筆は第Ⅰ章第1節を宮崎県教育庁文化財課主査堀田孝博が行い、その他の執筆及び編集は太田が行った。
- 7 石製羽口及び石器の石材分類については、松田清孝（埋蔵文化財センター）の協力を得た。さらにその他の出土遺物、遺構に関して同センター職員の多大なる協力を得た。
- 8 本書を作成するにあたり、諸機関の協力を得た。（以下五十音順敬称略）笠間稲荷神社、岡山県立記録資料館、延岡市教育委員会、明治大学
- 9 出土遺物・その他の諸記録は、宮崎県埋蔵文化財センターで保管している。

凡 例

- 1 本書で使用した地図は、国土地理院発行の5万分の1図（延岡）、延岡都市計画基本図32をもとに作成した。
- 2 本書で使用した土層断面及び遺物の色調等は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修「新版標準土色帖」を参考にした。
- 3 本書で使用した方位は国土座標第II系（世界測地系）の座標北、標高は海拔絶対高である。
- 4 陶磁器の器種分類については、東京都建設局 新宿区内藤町遺跡調査会『内藤町遺跡 第II分冊〈遺物編〉』、編年については、九州近世陶磁研究学会『九州陶磁の編年』2000を参考とし、その他の引用・参考文献は各章末尾に記載した。
- 5 遺構名の標記は、溝状遺構（S E）、畝状遺構、土坑（S C）、柱穴・ピット、不明落ち込み（S Z）に分けて示した。
- 6 本文中の遺物、挿図については、番号を通して付した。

目次

序 文

例 言

凡 例

第Ⅰ章 はじめに.....	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の組織.....	1
第3節 作業の経過.....	2
1 発掘調査の経過	
2 整理作業及び報告書作成の経過	
第Ⅱ章 遺跡の立地と環境.....	3
第1節 地理的環境	3
第2節 歴史的環境.....	3
第Ⅲ章 調査の記録.....	9
第1節 層序.....	9
第2節 遺構と遺物.....	12
第Ⅳ章 自然科学分析.....	38
延岡城内遺跡出土遺物の金属学的調査報告	
第Ⅴ章 総括.....	44

表 目 次

表1 陶磁器類観察表.....	32
表2 瓦観察表.....	36
表3 石製品観察表.....	36
表4 銅製品観察表.....	36
表5 鉄製品・鉄滓観察表.....	37
表6 土製品・ガラス製品・その他観察表.....	37
表7 資料一覧と調査項目.....	38

表8	化学組成分析結果.....	4 0
表9	調査結果.....	4 1

挿図目次

第1図	調査区グリッド配置図.....	2
第2図	延岡城内遺跡と周辺の遺跡.....	6
第3図	延岡城と周辺図.....	7
第4図	調査区北側土層断面図.....	9
第5図	調査区東および南側土層断面図.....	1 0
第6図	遺構分布図.....	1 1
第7図	溝状遺構土層断面図.....	1 2
第8図	溝状遺構出土遺物①.....	1 3
第9図	溝状遺構出土遺物②.....	1 4
第10図	畝状遺構土層断面図.....	1 5
第11図	畝状遺構出土遺物.....	1 6
第12図	各土坑土層断面図.....	1 7
第13図	1号土坑出土遺物.....	1 8
第14図	4号・5号・6号土坑出土遺物.....	1 9
第15図	落ち込み土層断面図.....	2 0
第16図	落ち込み出土遺物①.....	2 2
第17図	落ち込み出土遺物②.....	2 3
第18図	落ち込み出土遺物③.....	2 4
第19図	落ち込み出土遺物④.....	2 5
第20図	落ち込み出土遺物⑤.....	2 6
第21図	落ち込み出土遺物⑥.....	2 7
第22図	遺構外出土遺物①.....	2 9
第23図	遺構外出土遺物②.....	3 0
第24図	遺構外出土遺物③.....	3 1
第25図	鍛冶津(No.1)の全景と顕微鏡組織.....	4 2
第26図	楕形鍛冶津(No.2)・ガラス質津(No.3)の全景と顕微鏡組織.....	4 3
第27図	有馬氏時代の調査区周辺.....	4 4
第28図	三浦氏時代の調査区周辺.....	4 4
第29図	牧野氏時代の調査区周辺.....	4 5
第30図	内藤氏時代の調査区周辺.....	4 5
第31図	明治維新前後の調査区周辺.....	4 5

図版目次

巻頭図版 1 調査地遠景

巻頭図版 2 延岡城内遺跡出土遺物

図版 1 調査区全景

調査区北側土層堆積状況（西北より）

調査区東側土層堆積状況（西より）

疊層の広がり（西より）

包含層出土遺物

図版 4 出土遺物①

図版 5 出土遺物②

図版 6 出土遺物③

図版 2 溝状遺構検出状況（西より）

溝状遺構土層堆積状況（西より）

溝状遺出土状況（北より）

溝状遺構完掘状況（西より）

歛状遺構完掘状況（東より）

1号土坑完掘状況（北より）

2号土坑完掘状況（北より）

図版 7 出土遺物④

図版 8 出土遺物⑤

図版 3 3号土坑完掘状況（北より）

4号土坑検出状況（西より）

4号土坑遺物出土状況（北より）

5号土坑完掘状況（西より）

6号土坑検出状況（西より）

落ち込み土層堆積状況（北西より）

落ち込み遺物出土状況（西より）

第Ⅰ章　はじめに

第1節　調査に至る経緯

延岡拘置支所は周知の埋蔵文化財包蔵地「延岡城内遺跡」の範囲内に立地するが、その建設は昭和41（1966）年のことであり、庁舎・職員宿舎の老朽化が進んでいた。平成21（2009）年7月に庁舎・職員宿舎を基礎まで解体・撤去の後、同所に新築する計画があるということで、同拘置支所を直接所管する宮崎刑務所から、宮崎県教育庁文化財課に対して埋蔵文化財の取扱いに関する照会があつたため、埋蔵文化財の有無を確認する調査が必要であることを説明し、調査実施についての同意を得た。ただし、同拘置支所が稼働中であることから、同年7月6日に現地において協議を行い、日程や調査箇所について調整の上、同年9月1～3日に確認調査を実施した。調査の結果、庁舎部分は基礎や埋設管による搅乱が著しかったが、職員宿舎部分については残存良好な遺物包含層が検出され、16世紀後半～19世紀代の陶磁器類が多数出土した。これをうけ、新しい職員宿舎の建設範囲（200m²）については工事により埋蔵文化財が影響を受けると判断されたため、宮崎刑務所と宮崎県との間で発掘調査委託契約を平成22（2010）年8月6日付けで締結した。本発掘調査は宮崎県埋蔵文化財センターが同年10月18日から12月22日まで実施した。

第2節　調査の組織

延岡城内遺跡の発掘調査・整理作業及び報告書作成は下記の組織で実施した。

調査主体：宮崎県教育委員会

調査機関：宮崎県埋蔵文化財センター

調査協力：延岡市教育委員会

平成22（2011）年度　発掘作業・整理作業

所長	森 隆茂	副所長	北郷 泰道
総務課長	矢野 雅紀	総務担当リーダー	長友由美子
調査第二課長	永友 良典	調査第四担当リーダー	大村公美恵
調査第四担当主事	太田真理子	調査第四担当主査	黒木 俊彦
事業調整	宮崎県教育庁文化財課埋蔵文化財担当	主任主事	堀田孝博

平成23（2011）年度　整理作業

所長	森 隆茂	副所長	北郷 泰道
総務課長	坂上 恒俊	総務担当リーダー	長友由美子
調査第二課長	永友 良典	調査第四担当リーダー	大村公美恵
調査第四担当主事	太田真理子	主査	堀田孝博
事業調整	宮崎県教育庁文化財課埋蔵文化財担当	主査	堀田孝博

第3節 作業の経過

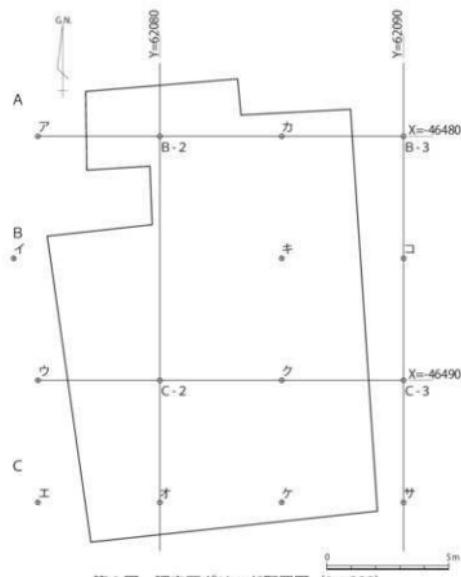
1 発掘調査の経過

調査地の現状は、延岡拘置支所及び職員宿舎として利用されていた。確認調査の結果により、拘置支所が立地していた場所は調査の対象とせず、職員宿舎のあった約200m²の調査をおこなった。発掘調査は平成22（2010）年10月18日より開始し、近現代と考えられる造成土を、約80cm重機によって取り除いた。その後、調査区に10m単位でアルファベットA～Cのグリッド杭を設定し、さらに5m単位でカタカナのア～クまでのグリッド杭を設定した。それ以後は、人力による掘削作業を進めていき、調査区北側より溝状遺構、中央より落ち込み、南側より畝状遺構を検出し、その他土坑、柱穴を調査区全体から検出した。中央部に位置する落ち込みは、当初2号溝状遺構として調査を進めていたが、人為的な掘り込み跡が明確に見られなかったことにより、自然地形の落ち込みとして記録をおこなった。

その他の遺構についての写真撮影及び実測図作成は適宜進めていき、同年11月29日、調査区及び調査位置の遠景撮影をおこなった。さらに掘削を進めた結果、河川の堆積とみられる礫層が調査区中央から南にかけて広がることがわかった。人為的な掘り込みは、調査区中央で検出した落ち込みの南側から8号土坑を検出したが、その他に掘り込みなどは見られなかった。平成22（2010）年12月22日に調査区の埋め戻し及び器材の撤収をおこない、現地における全ての作業を終了した。

2 整理作業及び報告書作成の経過

現地調査終了後、出土品及び図面、写真などの記録物を宮崎県埋蔵文化財センターに持ち帰り、記録物の整理や出土品の一部洗浄作業をおこなった。整理作業については、平成23（2011）年2月1日より開始し、水洗作業を2月に、出土遺物の注記作業を3月におこなった。接合、実測等その他の作業については、平成23（2011）年6月8日からおこない、接合状況や残存状況の良好な遺物を抽出し、記録作業を進めた。また、当調査区より多量に出土した鉄滓の検討をおこなうため、一部自然科学分析をおこなった。整理作業をおこなう中、検出した9基の土坑の内3基について、出土遺物や埋土の状況から近現代に掘り込まれた擾乱であると判断し、記録作業を進めた。



第1図 調査区グリッド配置図 (1:200)

第Ⅱ章 遺跡の立地と環境

第1節 地理的環境

延岡市は、宮崎県の北東部に位置している。北部から西部にかけて可愛岳（727.2m）、行藤山（829.9m）、岳山（613.8m）、鏡山（645.4m）といった九州山地が連なり、東部は日向灘に面している。市には南流する北川、南東流する祝子川、東流する五ヶ瀬川があり、分流や合流をしながら日向灘へ流れているが、中でも五ヶ瀬川は長さ約106kmの県内第二の大河として知られている。五ヶ瀬川は、熊本県と宮崎県の県境にある向坂山を源流として、阿蘇外輪山や高千穂を経て市の中央部で五ヶ瀬川、大瀬川に分流し、沖積平野を形成している。この平野には、初代延岡藩主高橋元種によって県城（延岡城）が築かれており、明治維新後廢城となるまで、藩の中心となっていた。現在城跡のある丘陵は延岡城跡、城山公園として多くの人に利用されている。今回調査をおこなった延岡城内遺跡は、城山公園の南、延岡市桜小路に所在している。調査地は、標高3～4mの比較的平坦な場所に立地し、現在は延岡拘置支所として機能しているが、絵図等により、近世には藩士の屋敷地として利用されていた。

第2節 歴史的環境

旧石器時代

赤木遺跡（舞野町字赤木）、今井野遺跡（天下町）、吉野遺跡（吉野町）等があげられる。赤木遺跡は、ナイフ形石器を中心とした石器群と、細石器群の二つの文化層が確認され、旧石器時代の当地を知る上で貴重な遺跡といえる。その他、山田遺跡（小川町）からは礫群が検出されている。

縄文時代

沖田貝塚（小野町）、地蔵ヶ森遺跡（小峰町）、今井野遺跡、吉野遺跡等がある。地蔵ヶ森遺跡、今井野遺跡、赤木遺跡（第1次）からは、集石遺構が検出され、石錆や磨石といった遺物が出土している。さらに、沖田貝塚からはサザエやハマグリといった貝類が出土したほか、鹿などの獸骨が多数出土している。また、山田遺跡からは、集石遺構、炉穴群、円形配石遺構、竪穴状遺構が確認されている。

弥生時代

山田遺跡、野田八田遺跡（野田八田町）、差木野遺跡（差木野町）、貝ノ畠遺跡（貝ノ畠町）、等があげられる。各遺跡からは竪穴住居跡が確認され、差木野遺跡からは後期の水田跡が確認されている。差木野遺跡等から、瀬戸内地方の影響を受けた土器が出土しており、瀬戸内地方との交流を示している。延岡城内堀跡からは、水田の一部やそれに伴う土留め用の矢板、木製農具が出土している。

古墳時代

古墳時代に入ると、上多々良遺跡や国指定史跡である南方古墳群（南方町）、県指定史跡である延岡古墳群（祝子町）、樅山古墳群（延岡市樅山）等が五ヶ瀬川流域に広く造営されるようになる。南方古墳群は、天下支群、吉野支群、大貫支群、野地・野田支群といった複数の支群によって形成されており、天下支群には五ヶ瀬川流域の最初の首長墓と考えられる10号墳が造営されている。その後、全長110mを超える県北最大の前方後円墳である、稲葉崎菅原神社古墳が5世紀前半から中ごろにかけて造営されたが、その後は小規模化し、空白期を迎える。

古代～中世

苅田窯跡（小峰町）は、9世紀から10世紀前半にかけての須恵器を生産した窯跡で、調査では半地下式の登り窯1基が確認され、広口瓶、蓋、甕などの須恵器が出土している。奈良時代に入ると、宇佐八幡の神領が延岡地方に設けられ、さらに平安時代に入ると、宇佐神領荘園が設定される。中世から戦国時代にかけて延岡地方を支配した土持氏の祖である田部氏は、宇佐神領荘園の庄司として任命される。延岡地方は古くは県と呼ばれており、戦国時代になると、土持氏が県を支配していた。天正6（1578）年、豊後を支配していた大友氏の侵攻によって土持氏自身が支配していた県を失い、松尾城は落城したが、同時に起きた耳川の合戦によって、大友軍は敗走し、土持氏は県を回復している。しかし、天正15（1587）年、豊臣秀吉の九州平定によって、土持氏の支配は終焉を迎える。平成10年に行われた松尾城の調査では、土持氏の居城であった曲輪群の構造の一部が確認されている。さらに、天下城山遺跡は中世城郭と考えられる。曲輪や溝状遺構、ピット、虎口状遺構が確認され、中世城郭の一端が明らかにされている。

近世

天正15（1587）年、豊前国香春（現福岡県香春町）より高橋元種が5万石で県に入封する。高橋元種ははじめ土持氏の居城であった松尾城（松山町）に居を構えていたが、慶長8（1603）年大瀬川、五ヶ瀬川に挟まれた中州にある独立丘陵上に県城（延岡城）を築城した。さらに、城下町の整備に着手し、南町、中町、北町の三町を設定した。しかし、慶長18（1613）年に罪人隠匿の咎により改易となる。慶長19（1614）年、高橋氏に代わり、肥前国日野江（現長崎県島原市）より有馬直純が5万3千石で入封する。有馬氏の統治は子の康純、孫の永純の70年余り続き、その間、県城は延岡城と改称される。^{註1)} 有馬氏は高橋元種が進めていた城下町の整備をおこない、元町、紺屋町、博労町、柳沢町が成立し、延岡七町と呼ばれる城下町が完成した。有馬氏は、こうした城下町の整備、塩田事業や植林事業といった産業の振興等をおこなったが、元禄3（1690）年、延岡藩領である山陰村で、百姓約1500人が田畠や家を捨てて逃散一揆がおこったため、元禄5（1692）年に越後国糸魚川（現新潟県）へと転封となる。同年有馬氏の代わりに、日向国における最初の諸代大名である三浦明敬が2万3千石で入封した。三浦氏は現在の宮崎県東臼杵郡北川町と大分県南海部郡宇目町との境にある、梓山峠付近の境界をめぐる「梓山境界論争」の解決や、多発する自然災害などから困窮した藩の財政のため藩政改革をおこなっているが、正徳2（1711）年、三浦氏は三河国刈谷（現愛知県）に転封となる。三浦氏以降、延岡藩は諸代大名によって藩政が敷かれることになる。三浦氏に代わり、牧野成央が延岡藩へ入封する。牧野氏は延岡藩最大の8万石を持ち、成央、貞道の二代、36余年間続いている。牧野氏は新田開発、水利事業として、岩熊井堰工事をおこなっている。享保9（1724）年、牧野氏の家臣である藤江監物が岩熊井堰工事に着手したが、享保16（1731）年、井堰の完成前に軍用費を消費した疑いを受け、藤江監物を含む親子4人は捕縛され、落命した。岩熊井堰はともに工事に着手した江尻喜多衛門が引き続きおこない、享保19（1734）年、完成している。延享4（1747）年、牧野氏は常陸国笠間（現茨城県）に転封し、同年、陸奥国磐城平（現福島県）より、内藤政樹が入封した。内藤氏は7万石で入封し、内藤政樹から政権の8代、明治4（1871）年の廃藩置県にいたる約125年間、延岡において藩政をおこなっている。慶応3（1867）年、將軍徳川慶喜によって大政奉還がおこなわれ、王政復古の大号令がおこなわれた。これにより、高橋氏から始まった延岡藩は、約300年の藩政が終わる。内

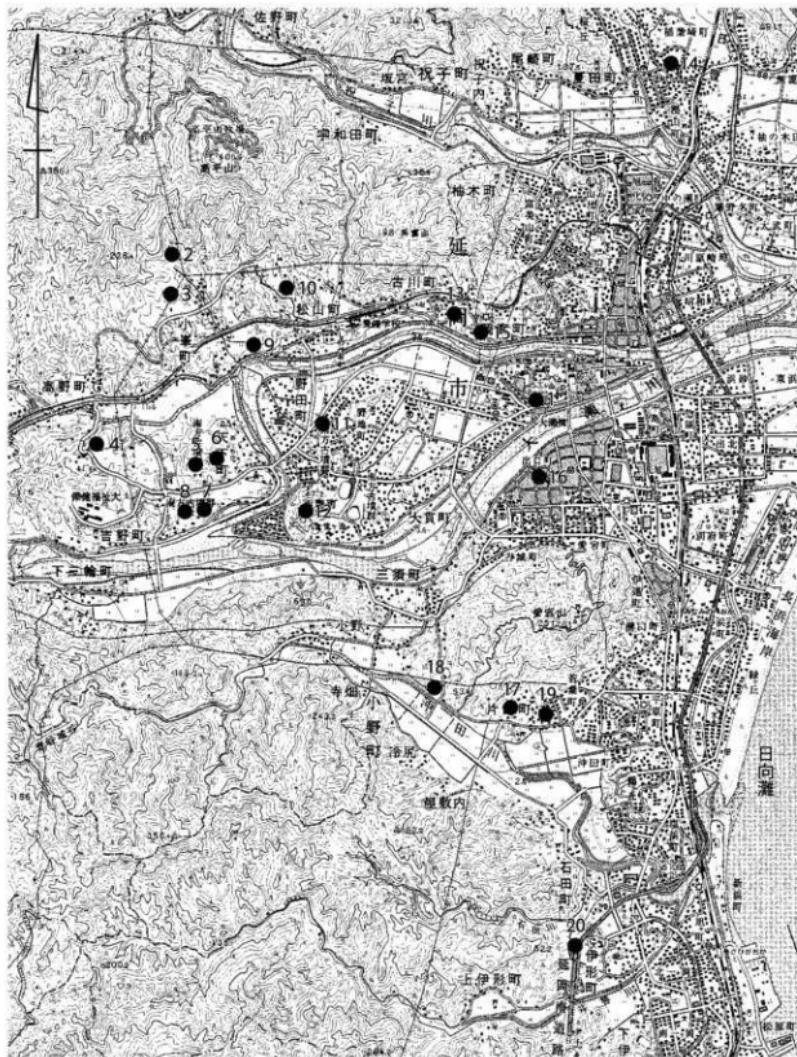
藤氏はその後も、亮天社や延岡女学校の設立、日平銅山や延岡電気所の経営等、学問や産業の振興に貢献している。延岡藩は明治4（1871）年、廢藩置県によって延岡県となるが、同年11月、美々津県へと編入した。さらに明治6（1873）年に美々津県が廃止されたことにより、宮崎県となったが、明治9（1876）年には鹿児島県に編入している。明治16（1883）年、鹿児島県より分離し、再び宮崎県となり、今日に至る。維新後延岡は、海運による交易等商業中心地として栄えたが、大正12（1923）年、化学工業都市として発展し、現在、工業都市としてさらなる発展を遂げている。

延岡における遺跡の調査の歴史は古く、江戸時代後期に内藤政船によって居住地である二ノ丸の調査がおこなわれている。大正15（1926）年には鳥居龍蔵によって南方古墳等の調査がおこなわれている。当調査地周辺では、平成3（1991）年、延岡城入口の調査がおこなわれ、階段跡や排水溝跡、番所跡、門礎石の基礎が確認された。さらに、平成7（1995）年、二ノ丸の調査がおこなわれ、通路状遺構や礎石建物跡が確認された。平成14（2002）年に調査がおこなわれた延岡城内遺跡（第3次）からは、内堀に続くと考えられる大溝遺構が出土している。延岡城内遺跡（第13次）からは、柱穴群、焼土坑1基、井戸跡2基、陶磁器などの出土が確認され、犬形土製品や銅錢「熙寧元寶」の改造鋏が初めて出土する等、城跡、城下町の様相が次第に明らかになりつつある。

註1) 県城が延岡城へと改称する時代については諸説あり、明暦2年、元禄5年という説もある。『延岡市郷土史年代表』より

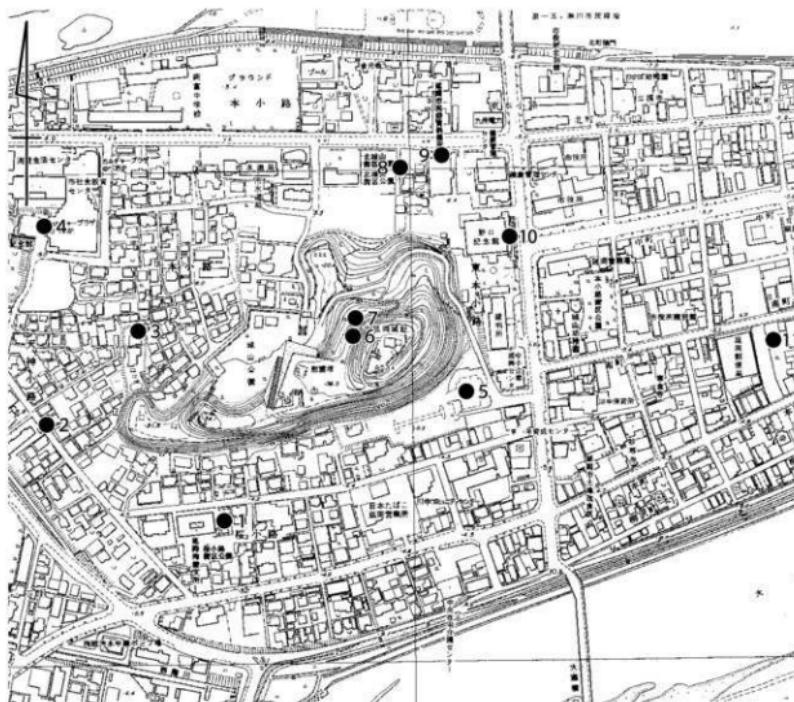
〈引用・参考文献〉

- 下中 弘 日本歴史地名大系第46巻 『宮崎県の地名』 1997 平凡社
宮崎県 『宮崎県史 通史編 近世上』 2000 宮崎県
宮崎県 『宮崎県史 別編 年表』 2000 宮崎県
延岡市史編さん室 『延岡市史 市制七十周年記念十年史』 平成十五年 延岡市
延岡郷土史年代代表編集委員会 『延岡郷土史年代代表』 平成10年 延岡市文化連盟 延岡史談会
延岡市教育委員会 『飯島遺跡（第2次）竹下遺跡 浜ノ山遺跡 松尾城（第1次）日の出町遺跡 肥登遺跡（第2次）櫛山遺跡 延岡城第14次 延岡城第15次 上多々良遺跡』
『平成9年度市内遺跡発掘調査に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』 1998
『市内遺跡』 『平成21年度市内遺跡発掘調査に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』 2010
『吉野遺跡（第6次） 吉野遺跡（第4次） 延岡古墳群第16号墳 多々良第1遺跡』
『新宮遺跡 吉野遺跡（第7次）』 『平成12年度市内遺跡発掘調査に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』
『平成5年度市内遺跡発掘調査事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』 1994
『今井野遺跡 延岡文化財調査報告書第4集』 1990
『延岡城内遺跡Ⅲ』 『上下水道課新庁舎建設にかかる延岡城内遺跡（第13次）発掘調査報告書』 2005
『今井野遺跡群（第4次） 竹下遺跡（第2次） 延岡城下町遺跡（第1次） 竹下遺跡（第3次） 天下 城山遺跡（第1次） 吉野遺跡（第5次）』 『平成11年度市内遺跡発掘調査に伴う埋蔵文化財調査報告書』 2000
『延岡城内遺跡Ⅰ』 『日向延岡新産業都市・都市計画街路本工事通線改良にかかる埋蔵文化財発掘調査報告書（1）』 2002
『市内遺跡』 『平成20年度市内遺跡発掘調査事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』 2009
『市内遺跡』 『平成18年度市内遺跡発掘調査事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』 2007
宮崎県教育委員会 『宮崎県文化財調査報告書 第26集』 1983



- | | | | |
|---------------|----------|-----------|------------|
| 1 延岡城内遺跡 | 2 小峰窪跡 | 3 地蔵ヶ森遺跡 | 4 今井野10次遺跡 |
| 5 南方古墳群 | 6 天下城山遺跡 | 7 吉野第2次遺跡 | 8 吉野町遺跡 |
| 9 松尾城遺跡 | 10 野門遺跡 | 11 野田八田 | 12 西階城周辺遺跡 |
| 13 上多々良(第12次) | 14 標山古墳群 | 15 延岡市古墳 | 16 恒富本村遺跡 |
| 17 片田遺跡 | 18 沖田貝塚 | 19 片田貝塚 | 20 林遺跡 |

第2図 延岡城内遺跡と周辺の遺跡 (1:50,000)



第3図 延岡城と周辺図 (1:2,500)

- 「林遺跡」『一般国道10号土々呂バイパス建設関係発掘調査報告書』 1990
 宮崎県埋蔵文化財センター
 「今井野第2遺跡・天下城山遺跡」『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第135集』2006
 「山田遺跡」『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第146集』2007
 「宮崎県文化財調査報告書 第31集』1988
 「野門遺跡」『一般国道10号線延岡道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』
 2006
 「赤木遺跡第8地点(第二次調査)」『一般国道218号北方延岡道路建設に伴う埋蔵
 文化財発掘調査報告書(2)』2007
 「赤木遺跡第8地点(第三次調査)」『一般国道218号北方延岡道路建設に伴う埋蔵
 文化財発掘調査報告書(4)』2008
 「黒仁田遺跡」『一般国道218号北方延岡道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
 (5)』2009
 「赤木遺跡第8地点(第一次調査)」『一般国道218号北方延岡道路建設に伴う埋蔵
 文化財発掘調査報告書(6)』

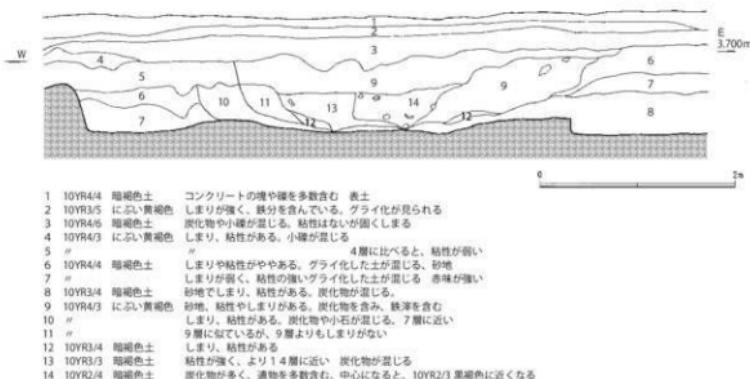
「吉野第2遺跡」『一般国道10号延岡道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書（3）』
2007
「林遺跡Ⅱ」『一般国道10号延岡道路建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書4』
2008

第Ⅲ章 調査の記録

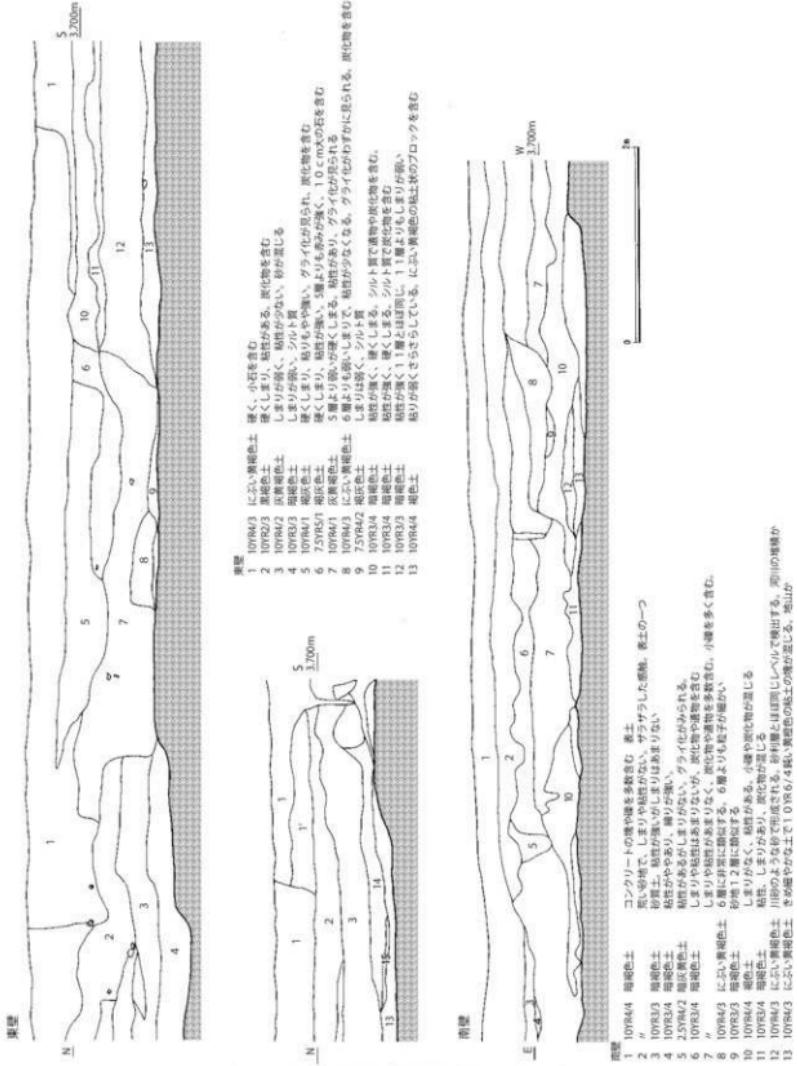
第1節 層序

調査対象地の現状は、第Ⅰ章第1節でも述べているが、延岡拘置支所の既存建造物として利用されていた。調査地は市街地であることから、調査に至るまで多くの土地利用があったことが考えられ、実際に調査に着手すると擾乱が多く見られた。調査区の土層堆積状況は各壁面で一樣ではないため、各壁面の堆積状況の記録作業を行っている。その中で調査区北西部の一部は、現代の擾乱によって大きく削平されており、約80cm掘り下げても擾乱が続く状態であったため、北東部の壁面の記録作業をおこなった。

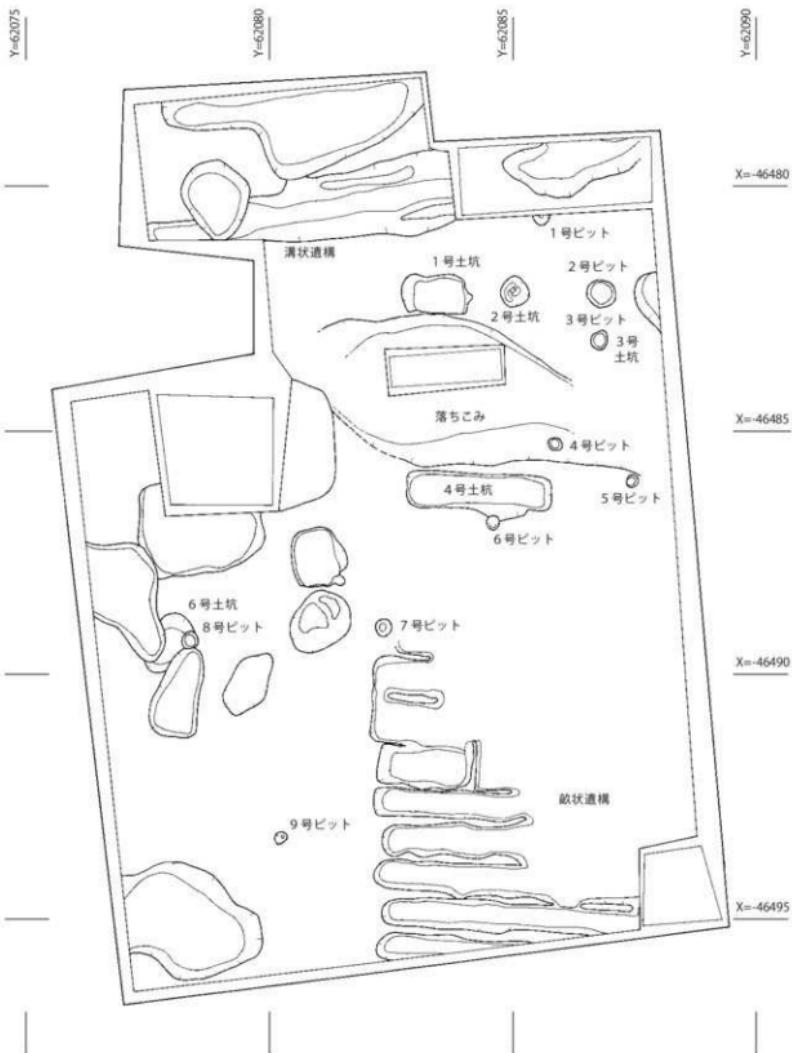
その他、調査区の南西部には、約120cmの深さの擾乱が見られた。調査区北東部、東側、南側壁面の堆積状況を記載している。調査区南側壁面の堆積状況が良好なため、ここでは、南側壁面の詳細を記載する。第1層は暗褐色土でコンクリートの塊や礫を多数含む現代の造成土である。調査区全体で見られ、約10cm～100cmの堆積があり、調査区西側に向かうほど堆積が厚くなっている。第2層は、荒い砂地でしまりや粘性のない層である。第1層と同じく現代の造成土の一つと考えられる。第3層は砂質の強い暗褐色土である。第4層は第3層と同じ暗褐色土だが、しまりが強い。3層の一部とも考えられる。第5層はグライ化が見られる、暗灰黄色土で、2層から掘りこまれており、遺構もしくは擾乱と考えられる。第6層、第7層は炭化物や遺物を含む包含層である、東側壁面の5層、10層に対応する。東側壁面と比較すると、粘性・しまりは弱いが、炭化物や遺物の出土状況から、同一層と考えられる。第8層は畝の堆積と考えられる。6層に類似するが、粒子は細かい。南側壁面では、10層、11層まで炭化物が混じる状況が見られるが、12層、13層になると、黄褐色の層となり礫や粘土が混じる。この層は、河川の堆積によってできたと考えられる、自然堆積層の可能性がある。



第4図 調査区北側土層断面図 (1:50)



第5図 調査区東および南側土層断面図 (1:50)



第6図 遺構分布図 (1:100)

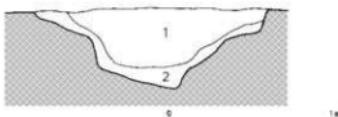
第2節 遺構と遺物

概要

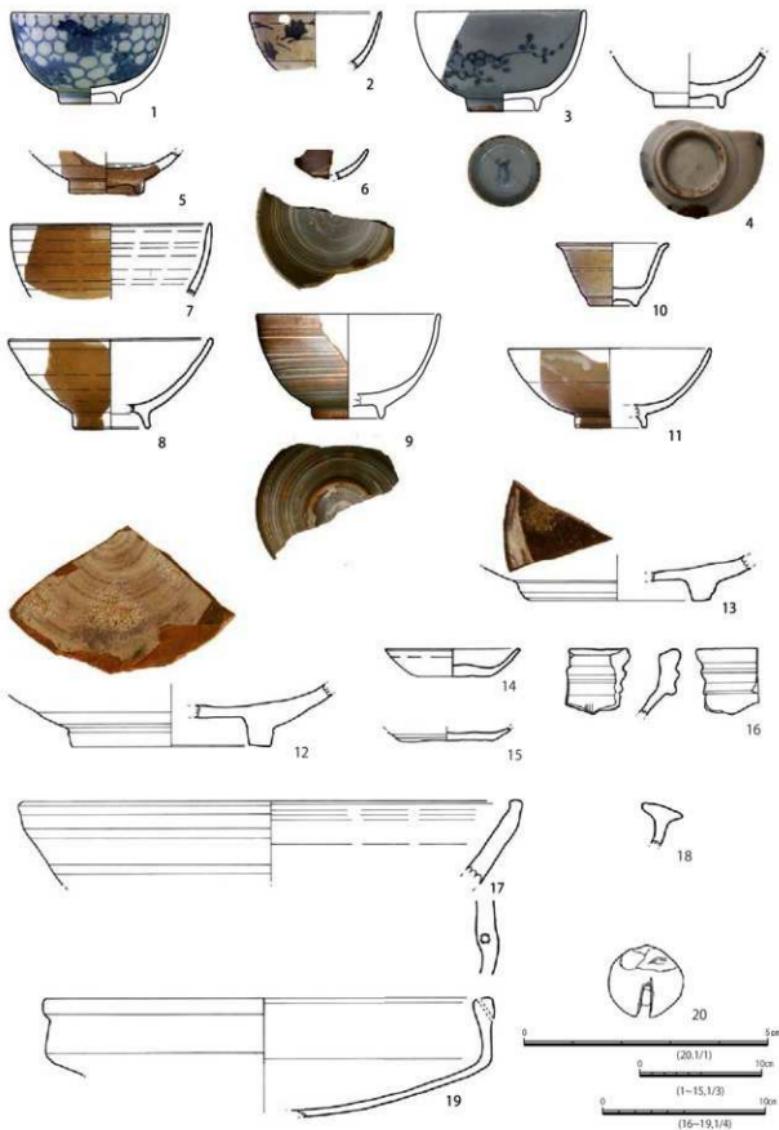
第6図は、調査区内の遺構分布を示した図である。（第6図）遺構は調査区全体に広がっていたが、擾乱等も多く見られる。溝状遺構1条、畝状遺構、土坑6基、柱穴9基、落ち込みを検出したが、遺構の一部は擾乱等により消失している。

溝状遺構（SE1）と出土遺物（第7図～第9図）

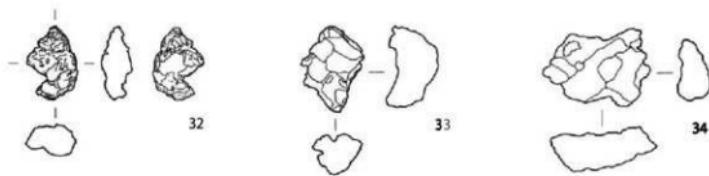
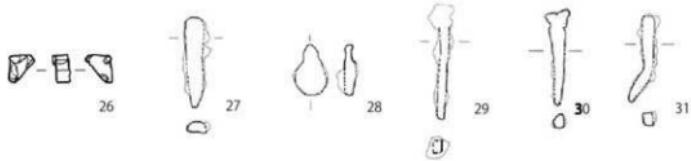
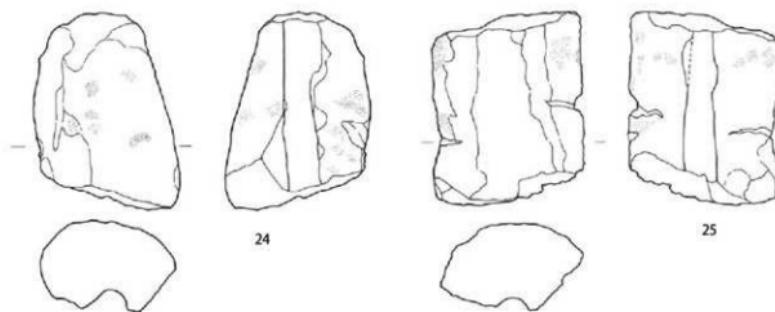
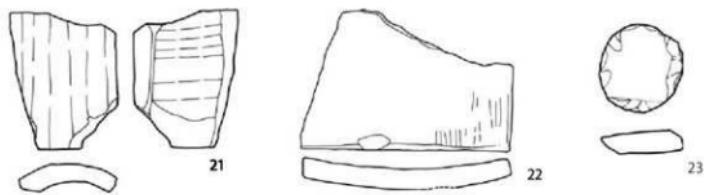
調査区北側、「ア」グリッドからB-2グリッド、「カ」グリッドにかかる範囲で検出した。溝状遺構（以下、SE1と略）は、東西に延びており、先行トレンチによって一部消失しているが、調査区外に続いていると考えられる。検出した長さはおよそ130cm、深さ約50cmあり、断面は「V」字状を呈している。SE1の堆積土は炭化物の混じる暗褐色土であり、そこから多くの遺物が出土している。SE1の埋土は、ほぼ1層で占められていることから、比較的短い間に埋まつた、あるいは埋められた可能性が考えられる。第8図、第9図の1～34はSE1出土の遺物である。陶磁器、土製品、瓦、鉄製品、鉄滓等が出土した。陶磁器は肥前系が多く、その他産地不明の陶器碗が出土している。1～9、10、12、13は肥前系である。（第8図）1～9は碗である。1はコンニャク印判で文様が施されている。18世紀後半に比定される。2は碗の口縁部から胴部である。外面にコンニャク印判による桐文が施されている。3、4は高台内部に大明年製の銘が施されている。3はくらわんか手のもので、19世紀に比定すると考えられる。9は疊付露胎で内外面に刷毛文を施している。10は磁器の小杯である。12、13は大型の皿か鉢と考えられる底部である。12は外面の見込みに砂目が3カ所見られ、二彩鉢と考えられる。11は産地等不明の陶器碗である。14、15は土師皿である。（第8図）ともに摩耗が激しいが、ナデ調整が施され、糸切底をしている。16、17はすり鉢である。（第8図）17は口縁部に鉄軸が施されている。18は甕の口縁部である。備前焼と考えられるが、小片のため明確ではない。（第8図）19は焰烙である。（第8図）土師質であり、胴部外面に煤の付着が見られる。20は土師質の土鉢である。完形で出土し、中に同じ土質の玉が入っている。（第8図）21～23は瓦である。（第9図）21は軒平瓦、22は平瓦で、22は上面にヘラ調整が見られる。23は瓦玉と考えられる。円形に打ち欠いた痕が見られる。24～26は石製品である。（第9図）24、25は羽口である。（第9図）24は砂岩製で約1/2残存している。復元内径2.6cm、外径12.6cmになり、熱を受け赤化した痕が見られる。25は凝灰岩製で、25と同じく約1/2残存している。復元内径3.0cm、外径16.2cmあり、熱を受け赤化した痕が見られる。26はチャート製で、明確な使用痕は確認できなかったが、火打ち石の可能性が考えられる。27～31はSE1より出土した鉄製品である。（第9図）その多くは錆の状態がひどく、器種不明のものもある。27、28は器種不明の鉄製品、—
29～31は釘と考えられる。31は頭が平坦になっていて、32～34は鉄滓である。（第9図）SE1の特徴は、多量の鉄滓を埋土中に含んでいることである。当調査区より出土した鉄滓の総計は約14.0kgになるが、その内、SE1からは13.1kg出土している。多くは椀形滓である。33、34は自然科学分析をおこなった鉄滓である。分析の結果、鍛錬鍛冶滓であることがわ
3.700m



1 10YR3/3 暗褐色土 やや粘性があり、炭化物が10%ほど混じる。
シルト質、鉄、陶器などの遺物を含む
2 10YR4/4 暗褐色土 粘性があり、ややしまりがある
第7図 溝状遺構土層断面図 (1:30)



第8図 溝状遺構出土遺物① (1:1、1:3、1:4)



0 10cm
(26 : 1/3)

0 10cm
(21-34:1/4)

第9図 溝状遺構出土遺物② (1:4)

かった。出土した鉄滓は、埋土中に散在していたことから、流れ込みと考えられる。当調査区では、鍛治関連の遺構は検出していないが、この分析の結果や多量の鉄滓の出土から、鍛冶が周辺地域でおこなわれていた可能性が考えられる。

歓状遺構と出土遺物（第10図、第11図）

調査区南側C-2グリッドで検出し、約8条を確認した。調査区北側へ向かうほど歓間が曖昧になる。遺構の検出状況から調査区外へ延びており、本来の歓はさらに広範囲で営まれていたことが考えられる。調査区の南西部に深さ約120cmの攪乱が見られ、歓の一部が削平されている。歓の幅は1条の長さが約526cm、幅は約58cmになる。歓間の堆積土は4層に分かれている。1層は炭化物の混じる、しまりのない暗褐色土、2層はしまりがやや弱い暗褐色土で、炭化物が混じっている。3層はさらさらとしたにぶい黄褐色土である。4層は3層とほぼ同じで、礫、遺物を含んでいる。

第11図は歓状遺構から出土した遺物である。35～38は肥前系である。（第11図）35は陶器の碗で高台部がたまご手をしており、18世紀と考えられる。36は磁器の小杯である。37、38は皿である。37は磁器皿で蛇ノ目四形高台をしている。38は陶器の皿で、ミニチュアの角皿と考えられる。高台部置付は露胎で、見込みに花文と考えられる文様が施されている。39は陶器の碗である。藁灰釉が施されている。萩系の碗と考えられる。40は石製品である。頁岩製で器種は不明だが、表面と右側面に擦痕が見られ、裏面に擦切技法が施されている。41～46は金属製品である。41、42は銅製品、43～46は鉄製品である。41、42は煙管の吸口である。ともに一部欠損しており、内部に木質等は残っていない。44～46は釘と考えられ、43は器種等不明である。

土坑（第12図～第14図）

1号土坑と出土遺物（第12図、第13図）

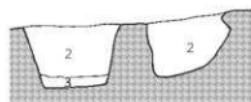
B-2グリッドで検出した。検出面の長さ約150cm、幅約70cmで、東西方向に長軸をもつ円形

4.00m

—



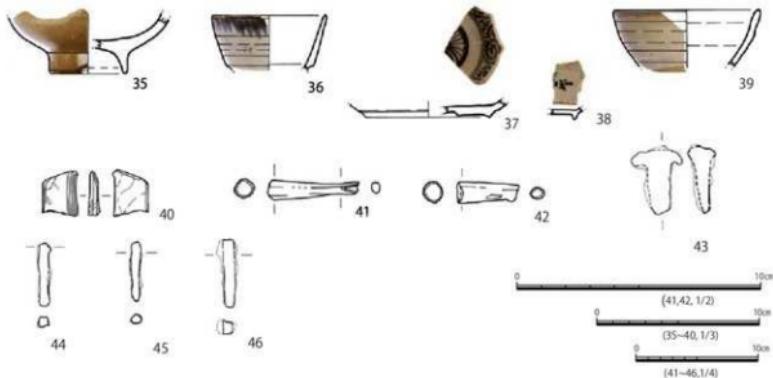
4.00m —



- | | | |
|-----------|---------|---|
| 1 10YR3/3 | 暗褐色土 | しまりがやや弱く、粘性がある。炭化物が混じる |
| 2 10YR3/4 | 暗褐色土 | しまりは弱く炭化物が混じる1～2mmほどの孔が全体的にあく
褐色粒子が混じる |
| 3 10YR4/3 | にぶい黄褐色土 | しまりは1層より弱く、シルト質。 |
| 4 10YR4/3 | にぶい黄褐色土 | 2層と同じ。疊が重じり、複層と考えられる。遺物が混じる |

— 8 1m —

第10図 歓状遺構土層断面図（1:30）



第11図 飲状遺構出土遺物 (1:2, 1:3, 1:4)

である。東西方向に長軸がある。埋土は暗褐色土1層であり、その中から、磁器の皿、小环、陶器の皿が出土している。磁器の小环が明治時代のものであるため、その頃に埋没したことが考えられる。

第13図は1号土坑出土の遺物である。47、48は皿である。47は輪花皿で、高台内部は蛇目凹形高台であり、見込みに風景が描かれ、口紅が施されている。19世紀の肥前系と考えられる。48は陶器の皿である。見込みにヘラ彫りで二重圓線が施されており、高台部脛付は露胎で、緑釉が施されている。瀬戸美濃産と考えられる。49は肥前産の小环である。薄手の器壁を持ち、見込みに風景の文様が色絵で施されている。明治時代と考えられる。

2号土坑（第12図）

B-2グリッドで検出した。1号土坑の東側に位置する。検出面の長さ約60cm、幅は約62cmの円形で、2段の掘り込みを確認した。埋土の堆積状況は黒褐色土のシルト質1層で、礫を含んでいる。遺物は出土していない。

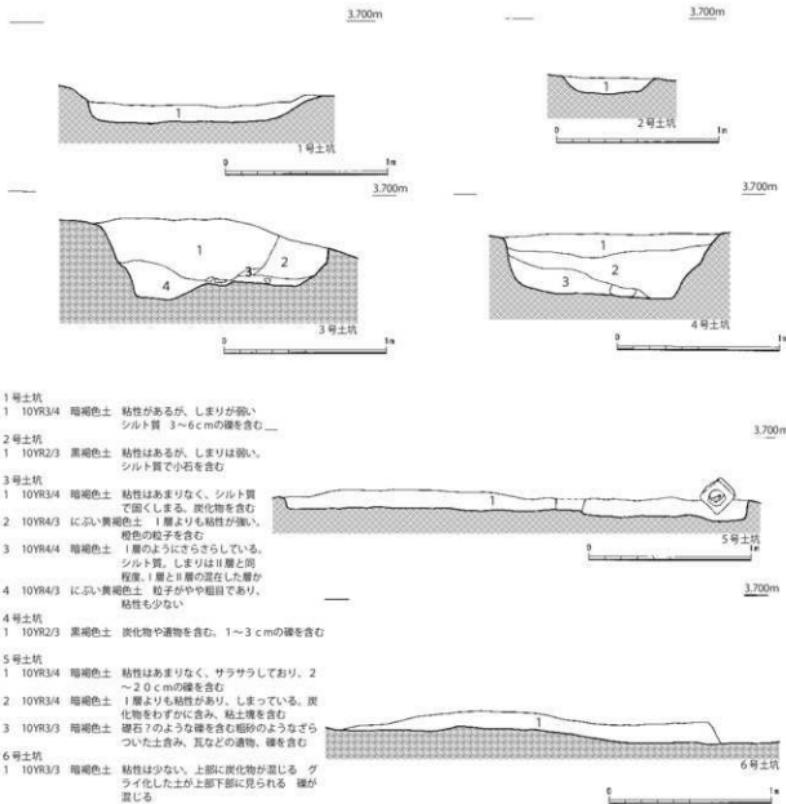
3号土坑（第12図）

「カ」グリッド、調査区東側壁面で検出した。調査区外へ続くと考えられる。検出面の長さ約120cmで椭円形をしていると考えられる。埋土は4層に分けられるが、遺物は出土していない。

4号土坑と出土遺物（第12図、第14図）

「キ」グリッドで検出した。落ち込みの南側に位置する。検出面の長さ約290cm、幅約75cmの梢円形をしている。検出した当初は、掘り込みが曖昧であったため、少し掘り下げたところ、明確な掘り込みを確認することができた。本来の掘り込み面は少し上にあったことが考えられる。底面からは須恵器の破片が1点出土した。叩きが施されているが摩耗しており、器種は不明である。底面からの出土ではあるが、1点の破片のみの出土であることから、流れ込みの可能性が考えられる。

第14図50~54は4号土坑出土の遺物である。50は陶器碗である。高台部が露胎している。京・信楽系である。51は瓦質の焜炉である。平面が正方形をしており、二重になっている。内形は素焼きで円形になっており、内面上部の三か所に突起が認められる。胴部に正方形の窓がつく。外形の内部には縦



第12図 各土坑断面図 (1:30)

方向のハケメ調整が施している。上面に刻印が見られるが、摩耗によって判別はできない。52は平瓦である。ナデ、ヘラ調整が施されており、上部に穿孔があけられている。53は須恵器片である。摩耗しており、破片のため器種判別できないが、叩きの痕が見られることから、甕の可能性が考えられる。54は土人形である。素焼きで、頭部と体部が欠損し、全体的に摩耗している。

5号土坑(第12図、第14図)

「イ」グリッドで検出した。検出面の長さ約110cm 幅113cmの円形をしており、埋土は3層に分かれれる。5号土坑の底面付近では、平瓦が出土した他、長さ約25cm、高さ15cmの礫や、長さ約20cm、高さ約10cmの礫が出土した。礎石とも考えられたが、礫には加工痕や使用痕が見られなかったため、自然石と考えられる。埋土の堆積は底面付近になると、粗砂のような土になる。

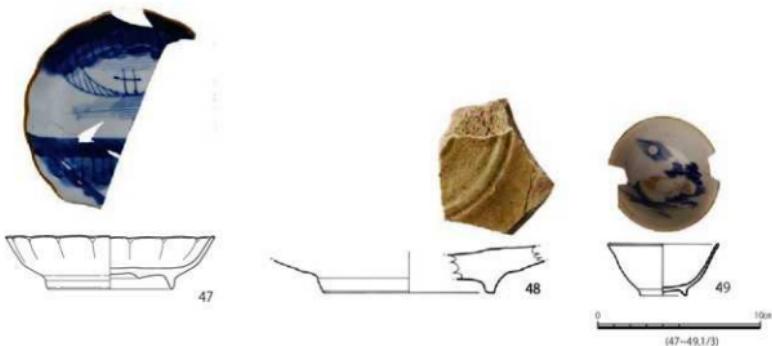
第14図55は5号土坑出土の遺物である。瓦が出土している。55は平瓦である。内外面及び側面にナデ調整を施す。

6号土坑と出土遺物（第12図、第14図）

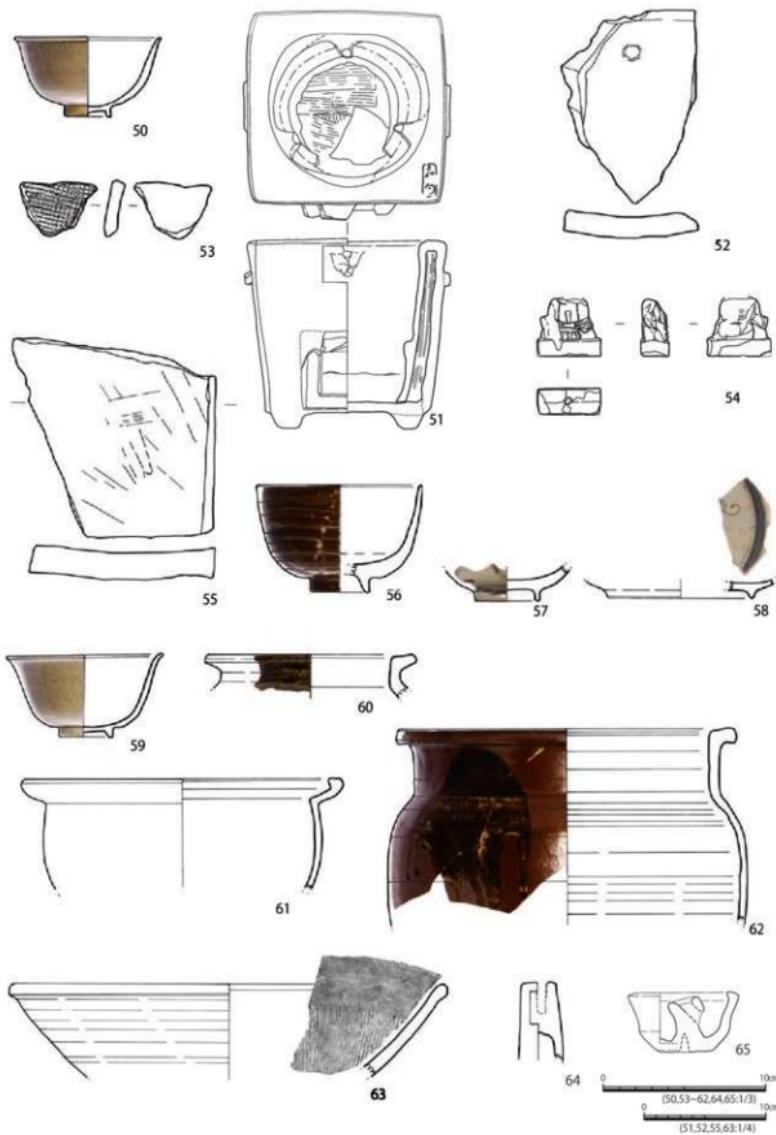
「キ」グリッドで検出した。落ち込みの南東部で検出し、当初は落ち込みの続きであると考えていたが、埋土の堆積状況から、別の遺構として検出をおこなった。碗が完形で出土したほか、肥前産の甕や備前産の壺などが出土している。これらは19世紀ごろの陶器類と考えられ、6号土坑は落ち込みと同じ時期に埋没したと考えられる。第14図56～65は6号土坑出土の遺物である。56、57は碗である。56は肥前系の陶器碗である。外面に刷毛目文様が施されている。見込みに二力所ハマ痕が見られ、高台部に砂が付着している。59は染付碗である。高台内に銘が施されているが、どのような銘であるかは不明である。58は染付皿である。高台部置付は露胎で、高台内部に砂が付着している。59は陶器の碗である。高台部が露胎している。京・信楽系と考えられる。60、62は甕である。60は備前産、62は肥前産と考えられる。62は外面の一部に鋸釉が施されている。61は土鍋である。内外面に鉄釉が施されている。備前系の可能性が考えられる。63はすり鉢で、全面に鉄釉が施されている。肥前系で18世紀に比定する。64は土師質で外面はナデ調整が施されている。上部の大半が欠損しているが、秉燭と考えられる。上部に穿孔があり、深さ2.4cm以上になる。65は秉燭である。鉄釉が施されており、底部に穿孔が見られる。19世紀と考えられる。

落ち込み（S Z）と出土遺物（第15図～第21図）

調査区中央、B-2グリッド内で検出した。当初、検出面が溝状に東西へ広がっていたため、B-2グリッドで検出したS E 1と並行する、別の溝状遺構として検出をおこなっていた。しかし、調査区北側に向かうと遺構の形状が不安定になり、さらに、調査区中央から南にかけて広がる河川堆積の礫層が流れ込んでいる様相を確認したため、自然地形の可能性が考えられる。落ち込みは東西に延びているが、調査区西側の攪乱が激しい箇所にかかっていたため、一部消失している。落ち込みを検出した面は、幅約300cm、長さ約620cmで、埋土は4層を確認した。1層は粘性、しまりがある暗褐色土、2層は粘性、しまりがある褐色土だが、3層と部分的に混じる。3層はしまりの強い暗褐色土で、炭化物や遺物を含み、小礫や白色粒子が混じる。炭化物、遺物の混在は西に向かうほど多くなる。4層はにぶい黄褐色土で荒い砂質土をしている。粘性、しまりともない。



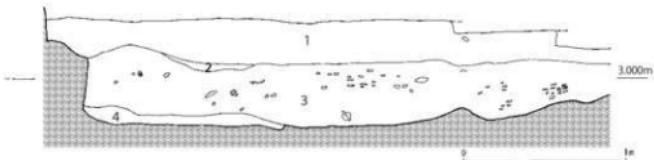
第13図 1号土坑出土遺物（1：3）



第14図 4号・5号・6号土坑出土遺物 (1:3、1:4)

第16図から第21図は落ち込み出土の遺物である。落ち込みからは炭化した他にも、動物の骨が小片ではあるが出土している。小片であり、損傷が激しく、種別等は不明である。

66~96（第16図、第17図）は肥前系である。66~73は碗である。（第16図）66は外面に青磁釉がかかり、見込みに花文が施されている。17世紀後半と考えられる。68は高台部豊付が露胎で、内面口縁部に墨弾きによる文様が施されている。焼継痕があり、高台内面に「平八」？のような文字が書かれた焼継痕が見られる。18世紀前半と考えられる。71は18世紀から19世紀の肥前産広東碗と考えられる。74~78は小杯、紅皿、紅猪口である。（第16図）74、76、77は染付、75、78は白磁である。74は初期伊万里で、17世紀後半と考えられる。76は薄手の小杯で、高台内に「玉」の銘が施されている。79~81は皿である。（第16図）79、80は染付皿である。79は大皿で、高台部をケズリ出し、高台内にハマ痕が残る。内面の一部が墨弾き技法を使用していることから、18世紀と考えられる。81は陶器の皿である。底部のみ残存しており、外面は露胎、内面は蛇目見込み釉はぎが施されている。17世紀後半と考えられる。82~84は鉢である。（第16図）84は染付の小鉢もしくは皿と考えられる。焼継の痕が見られ、高台内に「宣徳年製」の銘がある。82はそば猪口である。蛇目凹形高台をしており、18世紀後半と考えられる。83は段重と考えられる。染付で桔梗文を施した後、色絵で赤い筋を描いている。胴部の一部と口唇部内面が露胎である。85は火入である。（第17図）外面に緑釉が施され、高台部、内面に鉄釉が施されている。見込みに砂目が見られる。17世紀から18世紀と考えられる。86~88は仏壇器である。（第17図）87の高台内の割り込みはやや深く、厚めの器壁をしているが、その他の高台内の割り込みは浅く、いずれも坏部は深くやや開き気味に延びている。18世紀から19世紀と考えられる。89、90は瓶である。（第17図）89は高台部ケズリ出しでロクロ成形を施している。18世紀後半と考えられる。90は外面に鉄釉が施されている。91は花器と考えられる。（第17図）高台部豊付は露胎で、外面に文様が施されている。92~94は蓋である。（第17図）92、93は磁器蓋、94は陶器蓋である。92は染付の蓋で、内面に「文久年製」の銘がある。19世紀の小広東碗の蓋と考えられる。93は合わせ目に砂が付着している。94の外面は無釉で、内面にカキ目が施されている。95は盃台である。（第17図）高台部は露胎で、外面に文様が施されている。96はミニチュア製品である。（第17図）土鍋と考えられる。残存している部位前面に鉄釉が施されている。97は陶器碗である。胴部下半から底部にかけて無釉で、上半に薺灰釉が施されており、内面の一部に鉄釉が流し込まれている。高台内はケズリ出しである。萩系と考えられる。98~102は瀬戸美濃系である。（第17図、第18図）98~100は碗である。（第17図）高台部豊付は露胎で、98、99



- 1 10YR3/3 塗褐色土 粘性、しまりともにある。1~3cmの礫や遺物を含む。白色粒子や炭化物が混じる。
- 2 10YR4/4 褐色土 粘性、しまりともにある。3層よりもしまりが弱い。東側に行くと3層と混在した状況が見られる。
- 3 10YR2/3 塗褐色土 粘性、しまりともにある。しまりが強い。西側に向かうと炭化物、遺物の混じりが多い。白色粒子や橙色粒子が混じる。
- 4 10YR4/3 にぶい黄褐色土 荒い砂質土でえ、粘性、しまりともにあまりない。自然堆積と考えられる。

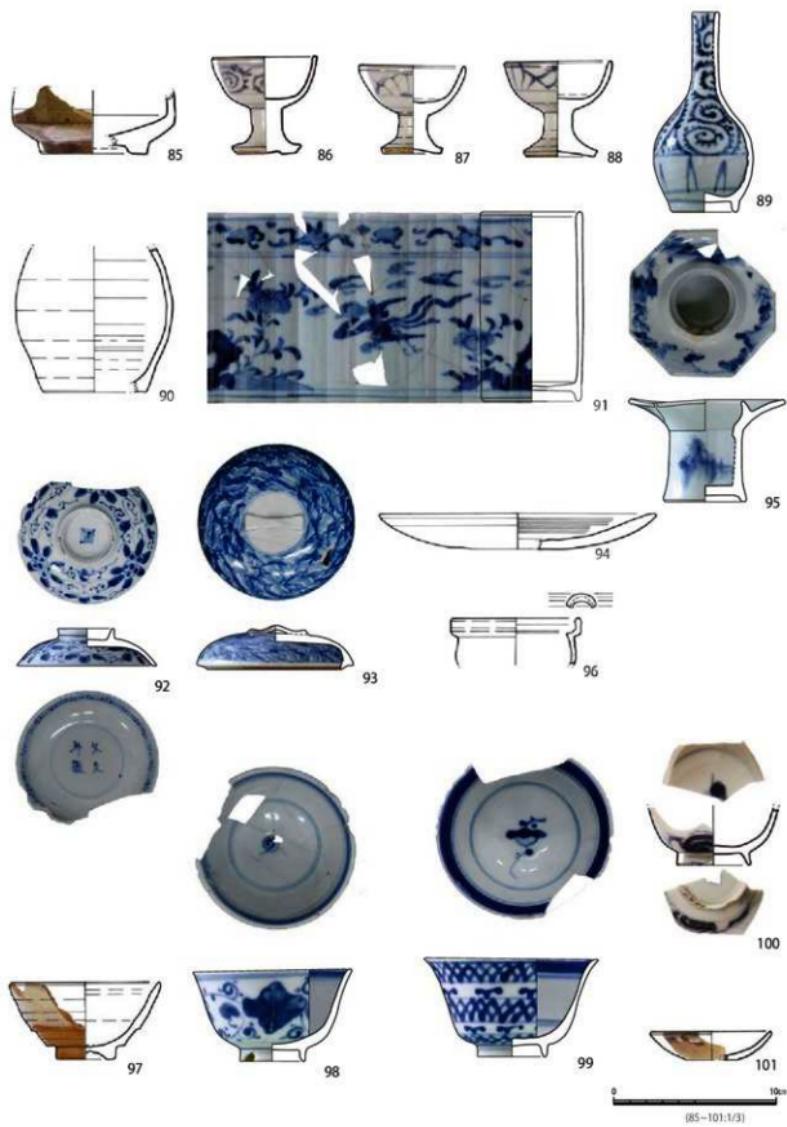
第15図 落ち込み土層断面図 (1:30)

は端反形をしている。19世紀と考えられる。100は高台部内面に角変形字と考えられる銘が施されている。101は秉燭と考えられる。内面に灰釉が施されており、口縁部外面に灰釉の溜りがあり、体部、底部は無釉である。102は鉢である。水鉢の一部と考えられ、ヘラ彫の文様の一部と、外面に銅線釉が施されている。103は青磁皿である。（第18図）内面に陽刻で文様が施されている。三田産と考えられる。104～116は関西系である。（第18図）104～109は碗である。105は高台部が露胎で、端反形の口縁部を持つ。19世紀と考えられる。106は小杉碗である。108は高台部が無釉である。109は高台部畳付が露胎で、外面に灰釉、内面に白泥が施されている。外面に鉄釉で文様が施され内面見込にハマ痕がみられる。110～112は蓋である。110は土瓶蓋、111は鍋蓋と考えられる。外面にはハマ痕が残っている。色調や胎土から、113と同一の組み合わせになる可能性がある。112は陶器蓋であるが、セットとなる器種は不明である。113は行平鍋である。外面の胴部から底部にかけて露胎である。手捏ねの足がつく。見込みにハマ痕があり、底部に煤が付着している。114は土瓶である。器壁が薄く、内面は露胎である。115、116は徳利である。115は底部、内面は無釉で、内面はケズリ調整が施されている。注口付近に銅線釉が施されている。116は内面が無釉で、ケズリ調整が施されている。外面に鉄釉で文様が施されている。19世紀と考えられる。117は蓮華である。（第18図）118は陶器の皿である。（第18図）外面の底部付近は露胎だが、その他は鉄釉が施され、灰釉が一部塗布されている。蓬萊山焼の可能性が考えられる。119～123は急須、土瓶である。（第19図）123は急須、119～121は土瓶である。119は外面に線釉が施されている。120は底部が無釉で灰釉が施されている。底部付近の器壁が薄くつぶらでいる。121は底部が露胎で、その他は灰釉が施されている。イッチン掛けで文様が施されている。122は土瓶の蓋である。内面は露胎で、外面に灰釉が施され、イッチン掛けで文様が施されている。121と122はセット関係と考えられる。123は底部が露胎で、19世紀と考えられる。いずれも産地等は不明であるが、器形から北部九州の可能性も考えられる。124～126は土鍋である。

（第19図）土鍋は落ちこみ内より5点出土している。その内特徴的な3点を図化した。3点のいずれにも口縁2カ所に耳がつく。124、125はほぼ完形で出土し、底部に墨書が施されている。底部の三ヶ所に手づくねの足がつく。124は底部が無釉で、見込みに三ヶ所ハマ痕が残っている。底部の一部に被熱の跡があり、「ミム」と墨書されている。125は、見込みに三ヶ所ハマ痕が残る。底部右側面に「○キ」と墨書がされている。底部に煤と被熱を受けた痕が見られる。126はやや大振りの土鍋である。底部は欠損しているが、胎土に被熱を受けた痕が見られる。128～130はすり鉢である。（第19図）128～129は関西系、130は肥前系と考えられる。131は焜炉である。（第20図）落ち込み内からは2点出土しているが、その内の1点を図化した。瓦質で胴部に正方形の窓がつく。口縁部付近に装飾が施されており、外面はミガキ調整が施され、線刻で文様が施されている。4号土坑より出土した焜炉よりもやや大きい。132は七輪と考えられる。（第20図）瓦質で、内面にナデ調整が施されている。133は火鉢である。（第20図）瓦質で、外面に装飾が施されているが、装飾中央部が欠損しているため詳細は不明である。134は土師質の壺である。（第20図）内面にハケ調整施されている。内面に煤のような黒斑が見られる。器種は不明だが、火消壺の可能性が考えられる。135～137は土師皿である。（第20図）135、136は素焼きで、糸切底をしている。137は透明釉が施されている。138はすり鉢である。（第20図）瓦質で、擂目は欠損しているが、防府産と考えられる。139～142は瓦である。（第20図）139、141は平瓦、140は軒丸瓦と考えられ、142は軒丸瓦である。巴文は時計回



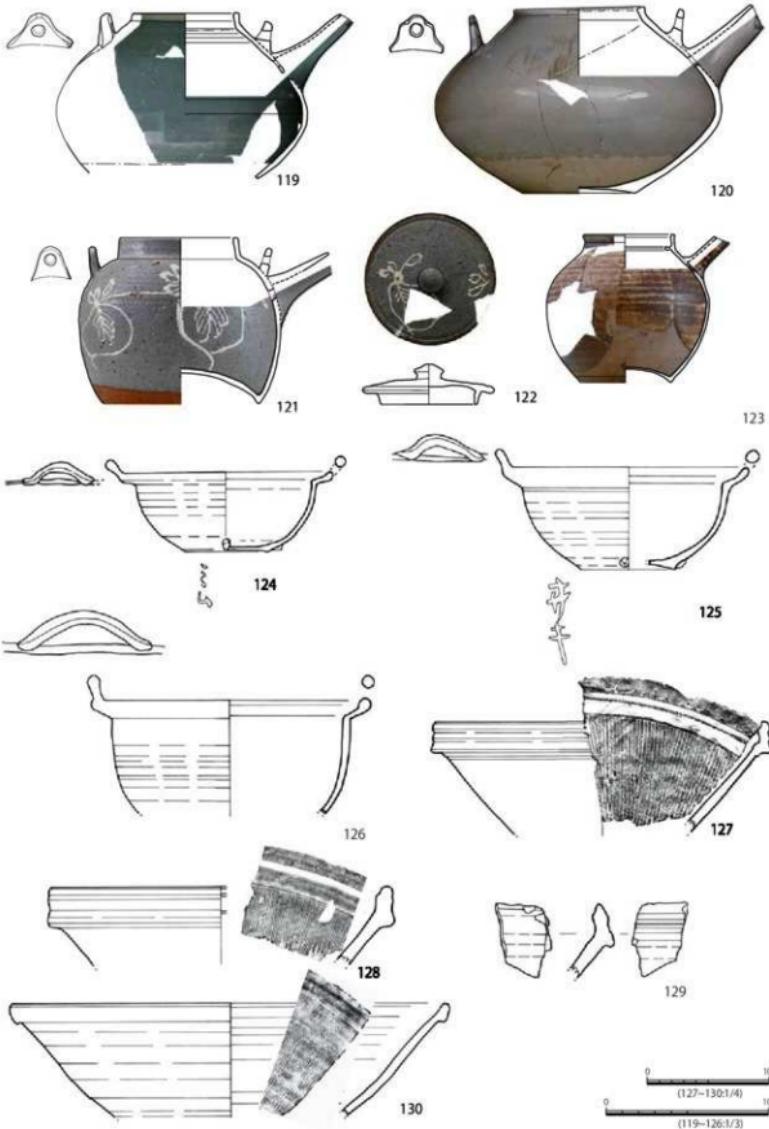
第16図 落ち込み出土遺物① (1:3、1:4)



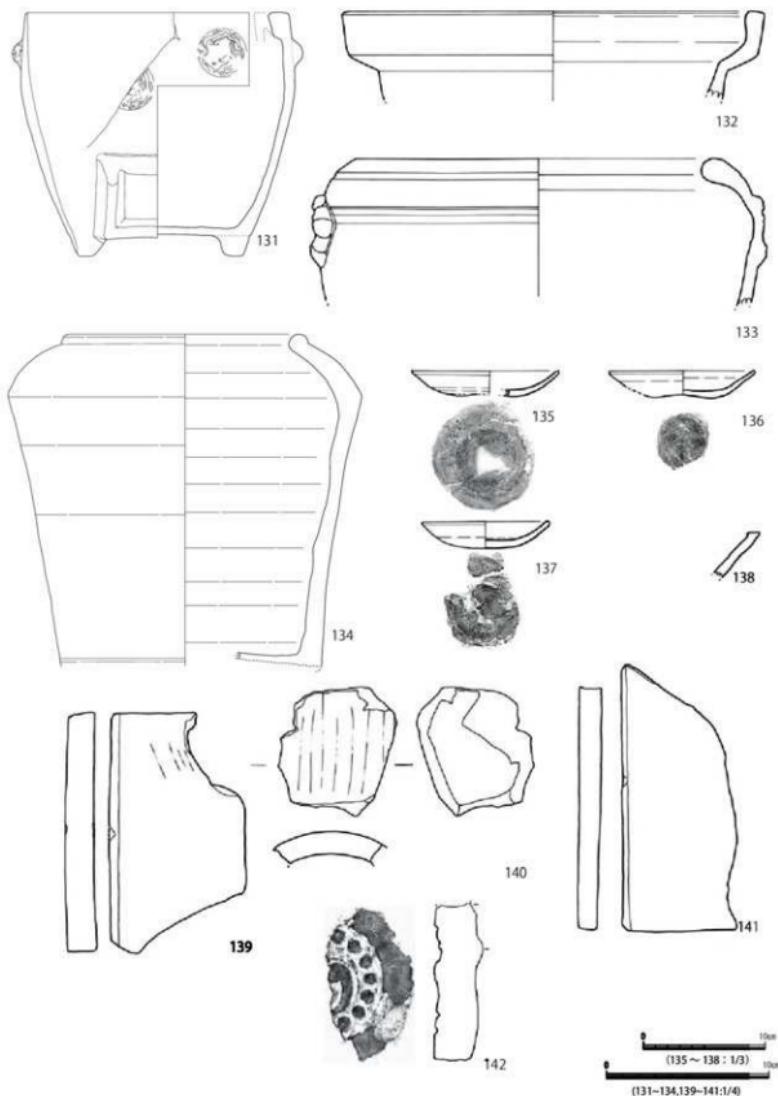
第17図 落ち込み出土遺物② (1 : 3)



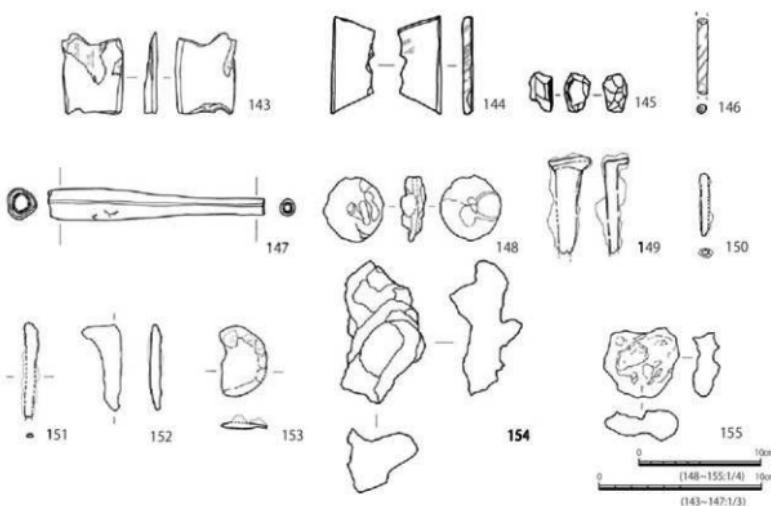
第18図 落ち込み出土遺物③ (1:3、1:4)



第19図 落ち込み出土遺物④ (1:3、1:4)



第20図 落ち込み出土遺物⑤ (1:3、1:4)



第21図 落ち込み出土遺物⑥ (1:3、1:4)

りと考えられ、文殊文は残存数が7個である。143～145は石製品である。(第21図) 143は粘板岩製で、表面と右側面に縦方向に擦った痕が見られる。144は珪質頁岩製で、表面と左側面に斜め方向に擦った痕が見られる。器種は不明だが、143、144はともに砥石の可能性が考えられる。145はチャート製である。大田井産のチャートと考えられる。左側面に使用痕が見られる。146はガラス製品である。(第21図) 爪の一端と考えられ、外端はらせん状に削られており、中央部に青い筋が通っている。147は煙管の吸口である。(第21図) 外面に装飾が彫られており、内部に木質が残っている。148～153は鉄製品である。(第21図) 148は鉄鋸と考えられる。鋸の状態がひどく、種類等は不明である。149～152は釘、153は器種不明である。欠損しているが、円形になると考えられる。154、155は鉄滓である。(第21図) 154は自然科学分析をおこなった鉄滓で、分析の結果、ガラス質滓であり、炉材の一端の可能性が考えられる。

遺構外出土遺物(第22図～第24図)

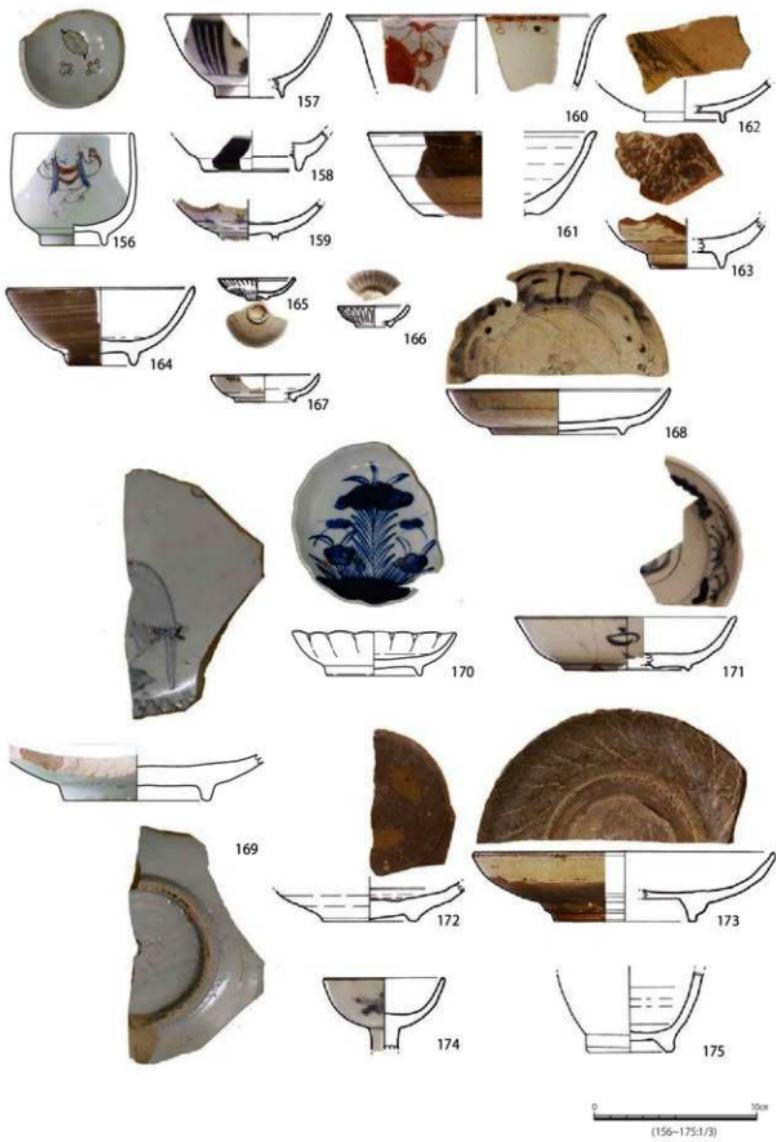
今回の調査では、遺構以外から多くの遺物が出土している。包含層出土遺物や表採等を遺構外出土遺物として取り上げた。図化した遺物のほか、摩耗した弥生時代から古墳時代と考えられる土器片や、輸入陶器等が出土している。この土器片は摩耗が激しく、器種や部位が不明のため図化をしていないが、図版8の実測図未掲載資料に記載している(掲載番号218)。

第22図、第23図は遺構外出土の遺物である。156～178は肥前系である。(第22図・第23図) 156～164は碗である。156は外面と見込みに色絵が施されている。17世紀後半と考えられる。157は外面に寿文が施されている。18世紀と考えられる。158は高台部豊付が露胎で、内外面に瑠璃釉が施されている。18世紀と考えられる。160は外面と口唇部内面に色絵が施されている。18世紀と考えら

える。161は鉄軸が施されているが、胴部から底部にかけて露胎である。天目形の器形をしており、17世紀と考えられる。165～167は紅猪口、紅皿である。（第22図）167は紅皿、165、166は白磁の紅猪口と考えられる。168～173は皿である。（第22図）169は高台内部に砂が付着している。17世紀と考えられる。171は高台部豊付が露胎である。18世紀後半と考えられる。170は染付皿である。高台部豊付は露胎で、内面に花文が施されている。172、173は陶器の皿である。172は外面が露胎で、内面に砂目の痕が残る。17世紀後半と考えられる。173は見込みを蛇ノ目軸はぎしている。174は仏飯器である。（第22図）环部が開き気味に伸びている。18世紀から19世紀と考えられる。175は瓶である。（第23図）全面無釉である。ケズリ出し高台をしており、内面はケズリ調整が施されている。176は鉢である。（第23図）八角をしており、高台部は蛇ノ目凹形高台である。19世紀と考えられる。177、179は蓋である。177は内面に寿字が施された、磁器の蓋で小広東碗の蓋と考えられる。178は組があり、合わせ目は露胎である。179は陶器の碗である。（第23図）底部は露胎で、藁灰釉が施され、一部に鉄軸のかけ流しが施されている。萩産と考えられる。180～184は瀬戸美濃系である。（第23図）180は磁器碗である。内、外面に繪文が施されている。19世紀と考えられる。181は輪花皿で、高台内に銘が見られる。182は鉢で、内面に文様が施されている。183は蓋である。碗蓋と考えられ、高台内に銘が見られる。184は仏飯器である。环部が浅く、高台内は露胎である。外面に色絵が施されており、明治時代と考えられる。185～189は関西系である。（第23図）185は陶器の碗である。高台部は露胎で、底部にむかうほど釉が厚くなっている。186は陶器の小杯である。外面に色絵が施されている。187は陶器の蓋である。鍋類の蓋と考えられる。外面にイッチン掛けで文様が施されており、飛びガンナが施されている。188は組み合わせの器種が不明の蓋である。外面が露胎で、内面に透明釉が施されている。土瓶の蓋と考えられる。189は片口鍋である。外面に飛びがんなが施されている。190は土瓶と考えられる。底部は露胎で、口縁部から胴部にかけて鉄軸が施されている。薩摩系と考えられる。191～193はすり鉢である。（第24図）191は防府製と考えられ、192は関西系と考えられる。193は内面が欠損しており、小片ではあるが、すり鉢と考えられる。194、195は石製品である。（第24図）194は石英製で、使用痕が右側面に見られる。195はチャート製で、表面に使用痕が見られる。2点とも火打石と考えられる。196は秉燭である。（第24図）土師質で、底部に「下火」？と浮彫が施されている。197、198は瓦である。198にはコビキが施されている。201～204は土鍤である。いずれも筒状に細く、201は3.1cm、203は3.8cmである。199は器種不明だが、おはじきと考えられる。磁器製品を打ち欠いている。200は鉄製品である。（第24図）刀子と考えられる。205～213は銅製品である。（第24図）205は煙管の吸口、206～208は金具と考えられ、206は取手と考えられる。209は器種不明の銅製品である。先端部が欠損している。金具の一種の可能性が考えられる。210は火箸である。211～213は銭貨である。211、213は寛永通宝であり、212は鎌、摩耗の状態がひどいため、不明である。

註 土坑の番号について、調査時は検出した順に番号をついている。整理作業の段階で攪乱等の整理をおこなったため、番号を新たにつけている。ただし、遺物の注記は変更による誤記と混亂を避けるため、調査時の略語を使用している。各土坑の番号は次のように対応している。

1号土坑—S C 6	2号土坑—S C 9	3号土坑—S C 4
4号土坑—S C 3	5号土坑—S C 7	6号土坑—S C 8

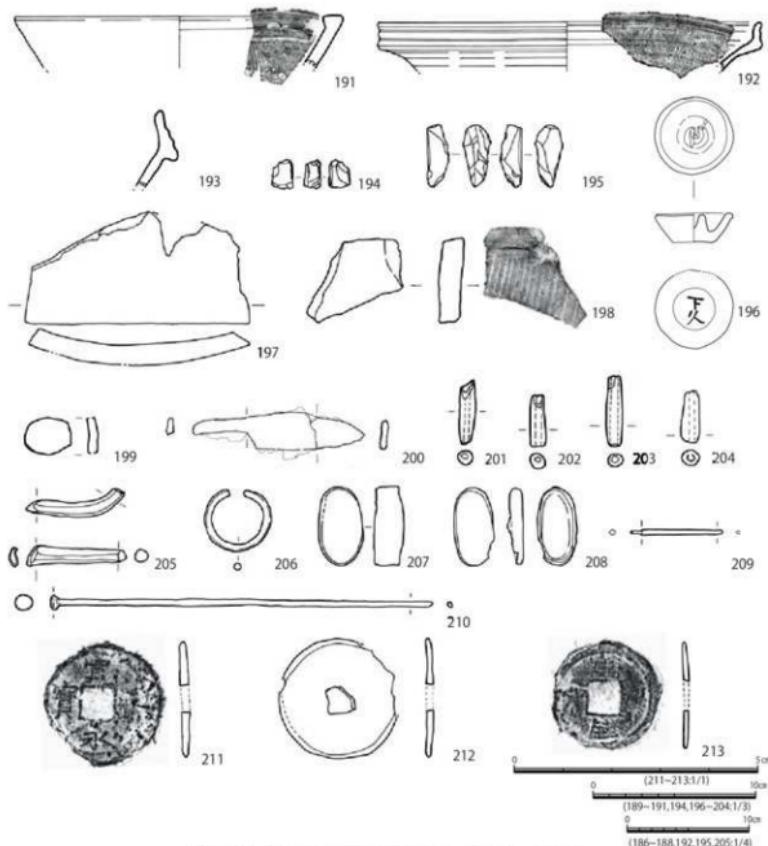


第22図 遺構外出土遺物① (1:3)



0
(176-190:1/3)

第23図 遺構外出土遺物② (1:3)



第24図 遺構外出土遺物③ (1:1、1:3、1:4)

〈引用・参考文献〉

- 九州近世陶磁学会 「九州陶磁の編年 九州近世陶磁学会10周年記念」2000
 東京都建設局 新宿区内藤町遺跡調査会 東京都新宿区「内藤町遺跡」第II分冊〈遺物編〉1992
 財団法人山口県ひとづくり財団/山口県埋蔵文化財センター「三見(さんみ)ほうろく窯跡・ほうろく茶屋跡」
 2009
 岡山市教育委員会「岡山城三之外曲輪跡 旧岡山藩藩学跡・岡山市立岡山中央中学校校舎改築に伴う発掘調査」
 2008
 大分県教育委員会「府内城三ノ丸遺跡」『一大分県共同庁舎(仮称)建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』
 1993
 宮崎県埋蔵文化財センター「曾井第2遺跡(第一次、第二次調査)」「一般国道269号(加納バイパス)交通円滑化事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書」2008

表 1 陶磁器類観察表

指標 番号	出土 場所	分類	器種	残存率/ 部位	法線 (cm)		調整・文様の特徴		色調		備考		
					口径	底径	高さ	外面	内面	外面			
1	SE1	磁器	碗	ほぼ定形	9.5	5.6	3.7	松竹梅、丸文、高台脚二重圓錐	透明釉	5GYV/1 灰白	5GYV/1 灰白	肥前	
2	SE1	磁器	碗	口縁部破片 (8.0)	—	—	—	桐文	透明釉	10Y7/1 灰白	10Y7/1 灰白	SZと接合 肥前	
3	SE1	磁器	碗	ほぼ定形	10.3	6.2	4.2	雪輪梅花文、高台内「大明年製」	透明釉	5GYV/1 灰白	5GYV/1 灰白	肥前	
4	SE1	磁器	碗	底部片	—	4.1	—	二重圓錐、植物文? 高台内「大明年製」?	透明釉	7.5GYV/1 綠灰	7.5GYV/1 明綠灰	肥前	
5	SE1	磁器	碗	底部片	—	4.4	—	貫入有、高台内圓錐 剥離	貫入有、蛇ノ目高台脚 剥離	2.5GY/2 灰黄	2.5GY/2 灰黄	肥前	
6	SE1	磁器	碗	口縁部破片	—	—	—	透明釉	口縁一重圓錐、植物文	7.5GYV/1 綠灰	7.5GYV/1 明綠灰	肥前	
7	SE1	陶器	碗	口縁部破片 (12.2)	—	—	—	桐毛目文、貫入有	桐毛目文、貫入有	2.5Y6/3 にぶい黄	2.5Y6/3 にぶい黄	肥前	
8	SE1	磁器	碗	口縁～底部 1/3	(12.4)	(4.4)	5.5	—	貫入有	貫入有	5Y6/3 オリーブ黄	5Y6/3 オリーブ黄	肥前
9	SE1	陶器	碗	1/3	(11.1)	(6.5)	4.2	刷毛目	刷毛目、高台内砂付 着	10YR5/2 灰黃褐	10YR5/2 灰黃褐	肥前	
第 8 回	10	SE1	磁器	小杯	1/2	(6.3)	2.9	3.85	花文? 二重圓錐	見込みに砂付着	7.5YV/1 灰白	7.5YV/1 灰白	肥前
	11	SE1	磁器	碗	1/2	—	—	口縁部に白泥、貫入有、見込部ノ目脚はぎ、貫 入有	—	5Y6/2 灰オリーブ	5Y6/2 灰オリーブ	—	
	12	SE1	陶器	皿	底部片	—	(12.2)	—	無釉、ヘラ削り	見込に砂付着	2.5YR5/4 にぶい黄	2.5YR5/2 灰白	肥前
	13	SE1	陶器	鉢	底部片	—	(10.8)	—	高台内鉄軸	貫入有、見込に砂付着	2.5YR3/3 暗オリーブ	2.5YR2/1 赤黒	肥前
	14	SE1	土師	皿	1/3	—	(5.8)	0.85	角切底	ナデ	7.5YR7/6 相	7.5YR7/6 相	—
	15	SE1	土師	皿	底部	—	4.2	—	角切底	ナデ	7.5YR7/6 相	7.5YR7/6 相	—
	16	SE1	陶器	すり鉢	口縁部破片	—	—	—	口縁に 2 条の沈線	回転ナデ	10YR5/2 にぶい青褐色	10YR5/2 にぶい青褐色	関西
	17	SE1	陶器	すり鉢	口縁部破片 (30.4)	—	—	—	回転ナデ、鉄軸	回転ナデ、口縁部鉄軸	5YR3/3 暗赤褐色	5YR3/3 暗赤褐色	肥前
第 11 回	18	SE1	陶器	腹	口縁部破片	—	—	—	鉄軸?	鉄軸?	7.5YR5/2 灰黒	7.5YR5/1 灰黒	肥前
	19	SE1	土師	炻器	口縁～底部	27.2	—	7.2	保が付着	回転ナデ	7.5YR4/4 財色	7.5YR4/4 財色	—
	20	磁	磁器	碗	底部片 1/4	—	(4.6)	—	透明釉、貫入有	透明釉、貫入有	5Y6/3 オリーブ黄	5Y6/3 オリーブ黄	肥前
	21	磁	磁器	小杯	口縁部破片 1/4	(6.9)	—	—	雨文、透明釉、貫入有	透明釉、貫入有	5GYV/1 灰白	5GYV/1 灰白	肥前
	22	磁	磁器	皿	底部片 1/4	—	(7.6)	—	高台脚一重圓錐、蛇ノ目 前唐草文、見込みに花 文	10Y7/1 灰白	10Y7/1 灰白	肥前	
	23	磁	磁器	皿	口縁部破片 1/4	—	—	—	透明釉、貫入有、四方窓	7.5YR1/1 灰白	7.5YR1/1 灰白	肥前	
	24	磁	磁器	皿	口縁部破片 1/6	(8.8)	—	—	口縁～腹部墨黒釉	墨黒釉	7.5Y7/1 灰白	7.5Y7/1 灰白	萩
第 13 回	25	SC6	磁器	皿	1/2	(12.6)	(7.5)	3.2	蛇ノ目高台脚はぎ	墨黒?	7.5YV/1 灰白	7.5YV/1 灰白	肥前
	26	SC6	陶器	皿	底部片	—	(10.4)	—	貫入有、高台内施釉砂	施釉、貫入有	7.5Y5/3 灰オリーブ	7.5Y5/3 灰オリーブ	濃戸美濃
	27	SC6	磁器	小杯	ほぼ定形	(6.8)	2.8	3.2	透明釉、口縁端部に削線	透明釉、貫入有	7.5GYV/8/1 明緑灰	7.5GYV/8/1 明緑灰	肥前 明治
	28	SC3	磁器	碗	完形	9.8	2.8	4.9	透明釉、貫入有	透明釉、貫入有	7.5YT/1 灰白	7.5YT/1 灰白	京・信楽系
	29	SC3	瓦質	盤	ほぼ定形	16.2	11.4	15.6	横ナデ	回転ナデ	2.5Y2/1 黑	10YR7/4 にぶい黄褐	—
	30	SC8	陶器	碗	1/2	10.0	3.4	6.6	鉄軸? 刷毛目文	鉄軸? 刷毛目文	7.5YR3/2 黒褐	7.5YR3/2 黒褐	福岡周辺
	31	SC8	磁器	碗	底部片	—	(4.0)	—	透明釉、貫入有、二重圓錐	透明釉、貫入有	7.5GYV/8/1 明緑灰	5GYV/1 灰白	肥前
第 14 回	32	SC8	磁器	碗	底	—	(8.8)	—	貫入有、高台内砂付着、見込みに草花文、貫入 有	10YR1/1 灰白	10YR1/1 灰白	肥前	
	33	SC8	磁器	碗	完形	9.4	3.0	5.2	透明釉、貫入有	透明釉、貫入有	2.5GYV/8/1 灰白	2.5GYV/8/1 灰白	京・信楽
	34	SC8	陶器	碗	口縁部破片 (13.0)	—	—	—	貫入有	口缸	5Y4/2 灰オリーブ	5Y4/2 灰オリーブ	福前
	35	SC8	陶器	土瓶	受部破片 (18.9)	—	—	—	鉄軸	鉄軸	7.5YR4/1 黒褐	7.5YR4/1 黒褐	—
	36	SC8	陶器	腹	1/5	(20.4)	—	—	鉄軸、一部に釉だまり	鉄軸	7.5YK3/4 明褐色	7.5YK3/4 明褐色	肥前
	37	SC8	陶器	すり鉢	破片 (35.6)	—	—	—	鉄軸、ハケ日	8 条椰目、鉄軸	7.5YR4/2 灰褐	7.5YR4/2 灰褐	肥前

65	SZ	陶器	米編	定形	6.8	3.1	3.7	ナデ後施釉	底部に穿孔	ナデ後施釉	N15/ 黒	N15/ 黒		
66	SZ	陶器	瓶	破片	—	4.5	2.0	高台部露胎	見込み文	SGY7/1 明オリーブ灰	SGY 明オリーブ灰	肥前		
67	SZ	磁器	碗	定形	9.6	4.6	7.3	唐人詩句文、口縁部四方 摩文、二重脚線、高台内 「肥」	唐人詩句文、口縁部四方 摩文、二重脚線、高台内 「肥」	10Y8/1 灰白	10Y8/1 灰白	肥前		
68	SZ	磁器	碗	定形	10.3	4.5	6.25	窓に花、高台内に施墨による雲 文、足に當、脚線	窓に花、高台内に施墨による雲 文、足に當、脚線	10Y8/1 灰白	10Y8/1 灰白	肥前		
69	SZ	磁器	碗	口縁～底部 1/3	(9.2)	(3.4)	4.45	草花文、口縁部脚部に一 重脚線、高台内に二重脚 線、見込みの輪が一部割かれている	草花文、口縁部脚部に一 重脚線、高台内に二重脚 線、見込みの輪が一部 割かれている	7.5GY8/1 明緑灰	7.5GY8/1 明緑灰	肥前		
70	SZ	磁器	碗	口縁～底部 (10.4)	—	—	当輪草花文、貫入有、高 台内輪脚線あり	当輪草花文、貫入有、高 台内輪脚線あり	10Y7/1 灰白	10Y7/1 灰白	肥前			
71	SZ	磁器	碗	口縁～側部 (10.8)	—	—	花文	口縁部脚線	7.5GY8/1 明緑灰	7.5GY8/1 明緑灰	肥前			
72	SZ	陶器	碗	底部破片	—	(4.4)	—	透明釉、貫入有、先巾高台、 高台内に穿孔有	透明釉、貫入有	2/5Y7/2 灰黄	2/5Y7/2 灰黄	肥前		
73	SZ	磁器	碗	脚部～底部	—	4.2	2.5	透明釉	透明釉	7.5GY8/1 明緑灰	7.5GY8/1 明緑灰	肥前		
第14回	74	SZ	磁器	小杯	脚～底部	—	(2.8)	草花文、高台輪脚	透明釉	7.5GY8/1 明緑灰	7.5GY8/1 明緑灰	肥前		
	75	SZ	磁器	碗	1/3	(7.0)	(2.6)	3.45	透明釉	透明釉	10Y7/1 灰白	10Y7/1 灰白	肥前	
	76	SZ	磁器	小杯	1/3	5.7	3.8	2.2	透明釉、鳳凰	透明釉、見込みに松?	7.5GY8/1 明緑灰	7.5GY8/1 明緑灰	肥前	
	77	SZ	磁器	虹口口	1/2	5.8	1.6	2.4	赤絵、虹葉	透明釉	7.5GY8/1 明緑灰	7.5GY8/1 明緑灰	肥前	
	78	SZ	磁器	虹口口 菊花形	破片	(2.0)	(0.9)	1.25	透明釉	透明釉	10Y8/1 灰白	10Y8/1 灰白	肥前	
	79	SZ	磁器	大皿	破片	—	(19.8)	風景文とかすみ?	墨書き 色と波	10Y8/1 灰白	10Y8/1 灰白	肥前		
	80	SZ	磁器	皿	底部破片	—	(11.0)	—	高台脇二重脚線、高台内 脚輪	見込みに染付文様	100Z7/1 明緑灰	100Z7/1 明緑灰	肥前	
	81	SZ	陶器	皿	底部破片	—	(4.2)	腰～高台内露胎。先巾高台 側付きに穿孔有	見込みの輪脚	7.5Y4/3 明オリーブ	7.5Y5/3 明オリーブ	肥前		
	82	SZ	磁器	そば猪	1/3	—	(6.9)	竹文様、蛇ノ目日向高台	見込み二重脚線	7.5GY8/1 明緑灰	7.5GY8/1 明緑灰	肥前		
	83	SZ	磁器	鉢	1/2	(14.0)	(9.2)	4.7	透明釉 草花文	透明釉、口縁部露胎	SGY8/1 灰白	SGY8/1 灰白	肥前	
	84	SZ	磁器	皿	磁器	(8.6)	4.4	3.25	草花文、高台内「宜徳年製」	草花文、見込み鳥文 様	SGY8/1 灰白	SGY8/1 灰白	肥前	
	85	SZ	陶器	火入れ	底部破片	—	(6.4)	—	貫入有	見込みに穿孔有、露胎	10Y5/2 オリーブ灰 7.5Y4/2 灰白	10Y5/2 オリーブ灰 7.5Y4/2 灰白	肥前	
	86	SZ	磁器	仏腹器	ほほ光明	7.0	3.6	5.95	唐唐草文、二重脚線	透明釉	7.5GY8/1 明緑灰	7.5GY8/1 明緑灰	肥前	
	87	SZ	磁器	仏腹器	口縁～底部 1/2	(6.3)	3.5	5.5	格子地半輪文、二重脚線	透明釉	7.5GY8/1 明緑灰	7.5GY8/1 明緑灰	肥前	
	88	SZ	磁器	仏腹器	ほほ光明	6.6	4.1	5.9	格子地半輪文、二重脚線	透明釉	7.5GY8/1 明緑灰	7.5GY8/1 明緑灰	肥前	
第17回	89	SZ	磁器	瓶	宋室	1.6	4.2	12.3	蛸唐草文、連舟、脚輪	ペラ削り	10Y8/1 灰白	10Y8/1 灰白	肥前	
	90	SZ	陶器	瓶?	脚部破片	—	(6.2)	—	貫入	露胎、回転ナデ	10YR3/3 に茶・銀刷毛	10YR3/3 に茶・銀刷毛	肥前	
	91	SZ	陶器	花瓶	ほほ完形	6.3	6.2	11.7	花文、羅文	透明釉	10Y8/1 灰白	10Y8/1 灰白	肥前	
	92	SZ	磁器	瓶	ほほ完形	(8.6)	3.5	2.3	唐草文、高台内に変形文 見込「文久元製」、二重 字	10条カリ寸	10Y8/1 灰白	10Y8/1 灰白	肥前	
	93	SZ	磁器	蓋	完形	9.6	—	2.7	墨面し文	受部に砂目	10Y8/1 灰白	10Y8/1 灰白	肥前	
	94	SZ	陶器	蓋	破片	(16.0)	(6.0)	(2.1)	露胎	10条カリ寸	10R4/4 赤刷	2.5YR4/4 に茶・小赤	肥前?	
	95	SZ	磁器	蓋	蓋	ほほ完形	9.6	5.0	6.3	楓葉文	透明釉	SGY8/1 灰白	SGY8/1 灰白	肥前
	96	SZ	磁器	にわら	口縁部破片	(7.6)	—	—	口縁部から脚部に鉄輪	鉄輪	10YR3/4 嘴周 10YR6/4 に茶・黄	10YR3/4 嘴周	肥前	
	97	SZ	磁器	碗	口縁～底部 0.5	(9.0)	3.3	4.75	口縁から腰にかけて墨 輪、渦巻き高台	鉄輪、脚部から見込 輪、渦巻き高台	2.5Y7/1 灰白	2.5Y7/1 灰白	甚	
	98	SZ	磁器	碗	完形	(9.7)	4.0	5.6	花唐草文、二重脚線	見込み渦巻き文?	10Y8/1 脚線	10Y8/1 脚線	美濃	
第18回	99	SZ	磁器	碗	口縁～底部 2/3	(10.6)	6.1	4.2	交差文?	二重脚線 見込脚?	10Y8/1 灰白	10Y8/1 灰白	瀬戸美濃	
	100	SZ	磁器	碗	近畿破片	—	(4.4)	—	二重脚線、墨輪? 高台内 変形文字?	見込脚?	7.5GY8/1 明緑灰	7.5GY8/1 明緑灰	瀬戸美濃	
	101	SZ	磁器	重復?	口縁～底部	(7.4)	(3.0)	1.75	口縁部施釉	貫入有	5Y7/1 灰白	5Y7/2 灰白	瀬戸美濃	
	102	SZ	陶器	甕	破片	(34.4)	—	—	二彩、貫入有	貫入有	5Y8/3 淡黄	5Y8/3 淡黄	瀬戸美濃	
	103	SZ	陶器	甕	破片	(10.4)	—	—	—	—	10A/2 オリーブ灰	—	—	

103	SZ	青磁 方形瓶	完形	7.1	3.7	1.65	貫付き高台内に砂付有 陽刻旋文様、「天之美様」	SGY6/1 5YRS/8 明ホ規	5GY6/1 5YRS/8 明ホ規	三田	
104	SZ	磁器 磁	筒	1/3	(8.8)	—	4.8 透明釉、貫入有 高台	透明釉、貫入有、高台 内露胎	10Y8/1 灰	10Y6/1 灰	
105	SZ	磁器 磁	筒	5/6	8.3	4.4	2.8 透明物、貫入有、腹~高 台内露胎	透明釉、貫入有 高台	5Y7/2 灰白	5Y7/2 灰白	
106	SZ	陶器 磁	筒	口縫部破片	(8.8)	—	— 松文様、貫入有	貫入有	5Y7/2 灰白	5Y7/2 灰白	
107	SZ	陶器 陶器	筒	口縫~底部	(8.8)	(3.2)	4.4 透明物	透明物	5Y7/3 浅黄	5Y7/3 浅黄	
108	SZ	磁器 磁	底部破片	1/3	—	(3.6)	— 二重脚輪、鉄輪、貫入有、 高台内露胎	貫入有	7.5Y6/1 灰	7.5Y6/1 灰	
109	SZ	陶器 磁	筒	3/4	8.3	3.3	4.85 灰輪に白輪、鉄輪(宝珠 文?)	透明物	5Y5/3 灰リープ 5Y8/2 灰白	5Y8/2 灰白	
第 18 回	110	SZ	陶器 盆	筒	1/3	(7.2)	(5.0)	2.2 色絵、貫入有	露胎	5Y8/3 灰白	10YR7/4 にぶい黄橙
	111	SZ	磁器 調査?	底部破片	—	—	—	透明物、貫入有、9条の 綴割、黒道具板	透明物、貫入有 灰リープ	7.5Y6/2 灰リープ	7.5Y6/2 灰リープ
	112	SZ	陶器 勝	鏡片	—	(6.4)	1.8 貫入有、透かし彫り	上部施釉貫入有、底部 露胎	2.5Y7/3 灰白	2.5Y7/3 淡 2.5Y7/3 淡	7.5Y7/3 淡 7.5Y7/3 淡
	113	SZ	磁器 行平鍋	口縫~底部 1/3	(17.4)	(7.8)	10.6 側部~底部露胎、底部に 瘤が残る	受部露胎、見込みにハマ 瘤が残る	7.5YS/2 灰リープ	7.5YS/2 灰リープ	7.5YS/2 灰リープ
	114	SZ	陶器 土瓶	口縫~側部	(7.0)	—	— 色絵、貫入有、肩部1条 綴割	口縫~側部露胎 綴割	2.5Y7/3 灰白	2.5Y8/2 2.5Y8/2 淡黄	2.5Y8/2 淡黄 7.5Y8/3
	115	SZ	磁器 徳利	口縫~底部 1/2	—	8.6	— 透明物、強部に錐輪	露胎、ヘラ削り	2.5Y8/2 灰白 10Y4/2 オリーブ灰	2.5Y8/2 灰白	7.5Y8/1 7.5Y8/1
	116	SZ	磁器 徳利	口縫~側部	3.9	—	— 草花文	口縫部露胎	5Y7/1 灰白	10Y8/1 灰白	7.5Y6/2 7.5Y6/2
	117	SZ	磁器 盆卓	鏡片	—	(3.2)	— 底面一部鉢剥ぎ	草花文?	10Y8/1 灰白	10Y8/1 灰白	10Y8/3 蓬莱山?
	118	SZ	磁器 盆	口縫~底部 鏡片	—	—	— 貫入有、底部露胎	見込みに梅絵、貫入 有	10YR5/3 にぶい黄橙	10YR5/3 にぶい黄橙	10YR5/3 蓬莱山?
	119	SZ	陶器 土瓶	口縫~腹部	(6.6)	—	— 口縫~腹部露胎、貫入有	口縫部露胎、回転ナデ 筋模様	10Y7/1 灰白	2.5Y8/2 灰白	—
	120	SZ	陶器 土瓶	ほぼ完形	8.0	6.9	11.4 肩部9条の綴割、植物文?	貫入有、腹~底部露胎	10Y8/2 灰白	5Y7/1 灰白	—
	121	SZ	陶器 土瓶	口縫~底部	(7.1)	9.6	10.1 肩部9条の綴割、植物文? 腹~底部露胎	鉄輪	7.5Y6/1 灰	2.5Y8/4 灰	2.5Y8/4 灰
	122	SZ	陶器 土瓶蓋	ほぼ完形	6.0	8.1	2.5 1条綴割、植物文?	鉄輪	7.5Y6/1 灰	2.5Y8/4 灰	2.5Y8/4 灰
	123	SZ	陶器 急須	筒	1/2	(5.7)	5.6	9.1 口縫~腹部鉢輪?	口縫部露胎	10YR4/3 にぶい黄橙 10YR5/2 灰黄(露胎)	5Y5/2 —
第 19 回	124	SZ	陶器 土瓶	完形	16.8	6.8	7.8 口縫~腹部鉢輪、底部に 鉄輪、見込みに筋模	露胎、見込みに筋模 筋模様	7.5Y8/4 灰褐色 5YR3/3 にぶい黄褐色	7.5Y8/4 灰褐色 5YR3/4 底部に墨書きあり	—
	125	SZ	陶器 土瓶	ほぼ完形	14.0	5.7	7.3 口縫~腹部鉢輪、底部に 鉄輪、見込みに筋模	鉄輪、見込みに筋模 筋模様	7.5YR3/4 灰褐色 5YR4/3 にぶい黄褐色	7.5YR3/4 灰褐色 5YR4/3 底部に墨書きあり	—
	126	SZ	陶器 土瓶	口縫~側部	(23.0)	—	— 回転ナデ、口縫~腹部鉢 輪、鉄輪あり	回転ナデ、鉄輪、鉄輪 あり	7.5YR4/3 灰褐色 5YR4/3 にぶい黄褐色	7.5YR4/3 灰褐色 5YR4/3 にぶい黄褐色	—
	127	SZ	陶器 すり跡	口縫部破片	(27.0)	—	— 鉄輪、口縫に2条の弦線	10条櫛目	5YR4/3 にぶい赤褐色 5YR4/6 赤褐色	5YR4/3 にぶい赤褐色 5YR4/6 赤褐色	—
	128	SZ	陶器 すり跡	口縫部破片	(27.4)	—	— 鉄輪、口縫に2条の弦線	8条櫛目、口縫に1条 の弦線、鉄輪	2.5YR4/4 にぶい赤褐色 5YR4/6 赤褐色	2.5YR4/4 にぶい赤褐色 5YR4/6 赤褐色	—
	129	SZ	陶器 すり跡	鏡片	—	—	— 口縫鉢輪?口縫に2条の 弦線	回転ナデ	5YR3/4/2 自然転?口縫部8回転ナ デ、10条櫛目	5YR3/4/2 自然転?口縫部8回転ナ デ、10条櫛目	—
	130	SZ	陶器 すり跡	口縫部破片	(35.6)	—	— 回転ナデ	自然転?口縫部8回転ナ デ、10条櫛目	5YR4/2 灰褐色 5YR4/2 灰褐色	5YR4/2 灰褐色 5YR4/2 灰褐色	—
第 20 回	131	SZ	瓦質 駕馬	口縫~底部 3/1	(21.6)	(13.6)	20.0 口縫に能?の印刷	不定方向のナデ	7.5YR17/1 黒	7.5YR4/1 灰褐色	—
	132	SZ	瓦質 七輪	鏡片	(25.0)	—	— 回転ナデ	回転ナデ	7.5Y4/1 灰	7.5Y4/1 灰	—
	133	SZ	瓦質 火鉢	鏡片	(22.0)	—	— 口縫に1条の弦線、側部 に2条の弦線	回転ナデ	10YR3/1 黒褐色 10YR3/1 黒褐色	10YR3/1 黒褐色 10YR3/1 黒褐色	—
	134	SZ	土師 油消 盃?	ほぼ完形	(20.0)	—	27.1 横ナデ、ケズリ	横ナデ	7.5YR8/4 4浅黄橙 改黄橙	7.5YR8/4 4浅黄橙 改黄橙	—
	135	SZ	土師 盆	完形	(8.6)	3.5	1.6 横方向ハケ目	横方向ハケ目	10YR8/4 4浅黄橙 改黄橙	10YR8/4 4浅黄橙 改黄橙	—
	136	SZ	土師 盆	完形	(8.8)	4.2	1.6 —	透明物、口縫部に瘤が 付着	7.5YR8/4 5浅黄橙 粗	7.5YR8/4 5浅黄橙 粗	—
	137	SZ	土師 盆	口縫~底部 2/3	(7.7)	2.9	1.6 ハケ目	ハケ目、底部切底	7.5YR7/4 にぶい一槽	7.5YR7/4 にぶい一槽	—
	138	SZ	陶器 すり跡	口縫部破片	—	—	— ナデ、露胎	ナデ、露胎	5Y7/2 灰白 5Y7/1 灰白	5Y7/2 灰白 5Y7/1 灰白	薄荷

156	B2 0005	磁器	碗	2/3	(7.7)	4.0	6.9	唐子遊び、團扇	見込に草と宝珠	10Y8/1	灰白	10Y8/1 灰白	肥前	
157	B2 0006	磁器	碗	口縁~底部	(10.0)	(4.0)	5.15	方文。高台脇~團扇縁	口縁二重團扇縁、見込~	2.5GYR/1	灰白	2.5GYR/1 灰白	肥前	
158	B2 0010	磁器	碗	底部破片	—	(5.8)	—	透明白	透明白	5PB3/1	明透灰	5PB3/1 明透灰	肥前	
159	B2 0010	磁器	碗	腰~底部	—	(5.8)	—	高台内施釉、草文	透明釉	7.5GY8/1	明透灰	7.5GY8/1 明透灰	肥前	
160	B2 0005	磁器	碗	口縁~側面	(15.8)	—	—	赤絵赤玉瓈文	口縁部赤絵瓈文	7.5GY8/1	明透灰	7.5GY8/1 明透灰	肥前	
161	B2 0002	陶器	碗	口縁~底部	(13.7)	(7.2)	—	鉄軸?、貫入有、腹から 高台にかけて露胎	鉄軸?、貫入有	5V8/2 4GYR/1 10Y8/4 にぶい滑胎	灰白	5V8/2 灰白	肥前	
162	B1 0001	陶器	皿	底部破片	—	(4.8)	—	透明釉、貫入有、高台輪	見込み山水文、透明釉、 から高台内施釉	2.5GY8/4	淡黄	2.5GY8/4 淡黄	肥前	
163	—	—	—	—	(4.8)	3.0	—	高台内施釉	高台内部軸だまり	5V8/4	淡黄	5V8/4 淡黄	肥前	
164	北カクラン	陶器	碗	口縁~底部	(11.4)	(4.0)	4.8	刷毛目文、貫入有、高台 内施釉砂付着	刷毛目文、見込み蛇の 目軸斜ぎ砂付着	10Y8/2	灰白	10Y8/2 灰白	肥前	
165	B2a マヌ	磁器	紅斑 菊花形	口縁~底部	(4.8)	1.2	1.35	透明釉、腰~高台内露胎	透明釉	10Y8/1	灰白	10Y8/1 灰白	肥前	
166	—	—	—	口縁~底部	(4.2)	(2.0)	1.3	—	透明釉	透明釉	10Y8/1	灰白	10Y8/1 灰白	肥前
167	B2 0002	磁器	紅絵 口?	口縁~底部	(6.5)	(3.6)	1.7	—	透明釉	透明釉	7.5GY8/1	明透灰	7.5GY8/1 明透灰	肥前
168	B2 0002	磁器	皿	口縁~底部	(13.6)	(7.6)	2.8	高台内施釉一条团隙	見込みに五花文	5V8/2	灰白	5V8/2 灰白	肥前	
169	飯14唇-2	磁器	皿	底部破片	—	(8.9)	—	貫入有、高台内砂付着	貫入有、見込み風景文?	10Y8/1	灰白	10Y8/1 灰白	肥前	
170	B2 1008	磁器	皿	口縁~底部	(10.1)	5.8	2.7	透明釉	草花文	10Y8/1	灰白	10Y8/1 灰白	肥前	
171	B2 力・牛	磁器	皿	口縁~底部	(13.3)	(7.4)	3.3	高台脇二重團扇、蛇ノ目 竹文様、見込二重團扇	高台脇二重團扇、蛇ノ目 竹文様、見込二重團扇	7.5Y7/1	灰白	7.5Y7/1 灰白	肥前系	
172	4T1-3	陶器	皿	底部	—	5.8	—	ヘラ削り、丸高台、高 台に砂付着	見込み部分的に斜削 ヘラ削り	5YR4/3	灰白	5YR4/3 灰白	肥前	
173	B1 0004	陶器	皿	口縁~底部	(18.3)	(8.6)	4.3	口縁部白施釉、側面部鉄、打刷毛目文、見込蛇の 高台内施釉	口縁部白施釉、側面部鉄、打刷毛目文、見込蛇の 高台内施釉	2.5GY8/2	灰白	2.5GY8/2 灰白	肥前	
174	B2 1008	磁器	仏壇器	口縁~腰部	1/3	(7.3)	—	—	透明釉、草花文	透明釉	7.5GY8/1	明透灰	7.5GY8/1 明透灰	肥前
175	B1 0.2	陶器	瓶	底部のみ	—	5.1	—	露胎、ヘラ削り	露胎、ヘラ削り	10Y8/4	にぶい滑胎	10Y8/4 にぶい滑胎	肥前	
176	SZ	磁器	鉢	2/3	(14.4)	6.7	6.55	蛇ノ目四型高台	草花文	10Y8/1	灰白	10Y8/1 灰白	肥前	
177	—	—	—	完形	8.4	3.7	2.5	鰐文	口縁部文様高台文、見 込「寺」変形文字、開 闊	10Y8/1	灰白	10Y8/1 灰白	肥前	
178	SZ	磁器	蓋	完形	9.9	11.3	4.1	風景文、墨書き「寿福」	貫入有、見込斜削剥ぎ	10Y8/1	灰白	10Y8/1 灰白	肥前	
179	3T1	磁器	碗	1/2	(8.3)	3.4	4.5	口縁から腰にかけて露胎 鉄、腰から高台にかけて 露胎、酒呑き高台	露胎高台、口縁から見込 みに鉄軸部分分し	7.5Y8/2 10Y8/2 灰白	2.5Y8/4 5GYR/1 灰白	2.5Y8/4 5GYR/1 灰白	萩	
180	B1 0001	磁器	碗	口縁~底部	(10.6)	(4.2)	6.0	高台内施釉、鰐文	鰐文	2.5GY8/1	灰白	2.5GY8/1 灰白	瀬戸美濃	
181	B1 821008	磁器	皿	完形	9.6	2.1	5.55	博と松葉、高台内「角」 変形文	梅花	10Y8/1	灰白	10Y8/1 灰白	瀬戸美濃	
182	B1 0002	磁器	皿	ぼぼ完形	9.7	4.5	2.8	透明釉	口縁部文様高台、水波文 に梅	10Y8/1	灰白	10Y8/1 灰白	瀬戸美濃	
183	—	—	—	口縁~底部	(8.4)	3.0	2.4	花透草文、二重團扇、高 台内	透明白	10Y8/1	灰白	10Y8/1 灰白	瀬戸美濃	
184	—	—	—	仏器 仏壇器	2/3	(7.4)	4.0	5.5	後軸、花?	透明釉	10Y8/1	灰白	10Y8/1 後軸	瀬戸美濃
185	6T	磁器	碗	口縁~底部	(8.8)	3.5	4.6	透明釉、貫入有、腰~高 台内露胎	透明釉、貫入有	10Y5/2	オーリーブ灰	10Y6/2 オーリーブ灰	京・絆榮	
186	B1 0006	磁器	小皿	口縁~腰部	(2.9)	—	—	赤絵、透明釉、貫入有	透明釉、貫入有	5V8/2	灰白	5V8/2 灰白	開西?	
187	—	—	—	陶器 製蓋?	口縁部破片	(13.0)	—	—	肩部鉄軸、脚部鉄軸	貫入有、口縁部露胎 一部砂付着(妙 日模?)	10Y8/4	にぶい黄色粉	10Y8/4 にぶい黄色粉	開西
188	東西カベ	陶器	皿	破片	(10.2)	(4.8)	3.1	貫入有	露胎、一部砂付着(妙 日模?)	5V4/2	灰オーリーブ	5V4/2 灰オーリーブ	開西系	
189	B1 0002	陶器	手平口	口縁部破片	(18.4)	—	—	鉄軸、注口部鉄軸	口縁部露胎 にぶい根	7.5YR6/4	灰白	7.5YR6/4 灰白	開西	
190	—	—	—	陶器 土瓶	口縁~底部	(8.3)	—	—	口縁~脚部鉄軸?	露胎、口縁部自然軸?	2.5V3/3	オーリーブ灰	5YR4/2 灰	薩摩
191	表区	陶器	すり皿	破片	(26.8)	—	—	—	—	5YR7/6	根	5YR7/6 根	防府 黒	
第24回	192	2T-5	陶器	すり皿	破片	(30.8)	—	—	口縁に2条の沈線	8条細目	5YR4/3	にぶい根	5YR4/3 にぶい根	開西?
193	—	—	—	陶器 瓢?	破片	—	—	4.8	—	7.5YR5/4	にぶい根	7.5YR5/4 にぶい根	開西?	

表2 瓦観察表

掘藏番号	出土場所	分類	残存率/ 部位	大きさ(cm)			特徴		色調		備考
				最大長	最大幅	厚み	外面	内面	外面	内面	
21	SE1	軒平瓦	破片	11.2	8.1	1.6	縦方向のハケメ	ハケメ	2.5Y6/2灰黄	2.5Y6/3 にぶい黄	
22	SE1	平瓦	破片	19.0	12.7	1.8	ヘラケズリ		5Y5/1灰	5Y5/1灰	
23	SE1	丸玉	完形	6.7	6.7	1.75	ハケメ		5Y5/1灰	2.5Y7/1灰	
52	SC3	平瓦	破片	10.8	15.7	1.7	穿孔有		10Y5/1灰	N4灰	
55	SC7	平瓦	破片	16.3	16.60	2.7			5Y5/1灰	5Y5/1灰	
139	SZ	平瓦	破片	11.3	19.6	2.5			N3/0暗灰	N5/0灰	
140	SZ	丸瓦	破片	8.85	8.1	0.15			N4灰	N4灰	
141	SZ	平瓦	破片	10.6	9.65	1.8			N3/0	N4/0	
142	SZ	軒丸瓦	破片	12.7	6.8	2.9	ハケメ		5Y4/1灰	5Y4/1灰	
197	2T-5	平瓦	破片	9.2	18.4	3.0			10YR6/4 にぶい黄相	10YR6/4 にぶい黄相	
198	B2カ 0004	平瓦	破片	6.9	6.8				10YR6/4 にぶい黄相	10YR6/4 にぶい黄相	

表3 石製品観察表

掘藏番号	出土場所	器種	石材	大きさ(cm)			重量(g)	備考
				最大長	最大幅	最大厚		
24	SE1	羽口	砂岩	16.8	11.9	8.25	1600	被熱痕
25	SE1	羽口	凝灰岩	16.69	12.95	7.5	1332	被熱痕
26	SE1	火打石	チャート	1.7	1.6	1.16	3.1	
40	破	不明	頁岩	3.65	2.8	0.9	11.2	正面・右側面に研磨痕、挫切技法
143	SZ	砾石?	粘板岩?	6.6	4.97	1.0	40.4	正面・右側面に研磨痕
144	SZ	砾石?	珪長岩?	6.5	2.5	0.6	13.6	正面・右側面に研磨痕
145	SZ	火打石	チャート	2.39	1.4	1.35	4.6	
194	一括	火打石	石英	2.45	1.7	1.3	8.1	
195	一括	火打石	チャート	5.29	2.3	1.83	20.1	

表4 銅製品観察表

掘藏番号	出土場所	器種	大きさ(cm)			重量(g)	備考
			最大長	厚み			
41	破	煙管(吸込)	3.8	0.7	1.5	一部欠損	
42	破	煙管(吸込)	2.4	—	1.5	一部欠損	
147	SZ	煙管(吸込)	8.7	—	14.0	木質が残る。窓形?	
205	C2グリッド南東	煙管(吸込)	4.1	—	2.5	先端がつぶれている	
206	発掘(大)	取っ手?	2.7	0.2	3.9		
207	B2グリッド「カ」内	刀具?	3.3	—	4.1	一部欠損	
208	「ク」グリッド離別上	金具?	3.1	0.5	2.2	一部欠損、表面が丸みを帯びる	
209	C2グリッド9層	金具?	5.6	—	3.2	先端欠損	
210	C2グリッド9層	大署?	23.5	—	20.5		
211	耕土	錢貨	2.4	0.1	1.1	寛永通宝	
212	C2グリッド9層	錢貨	3.0	0.1	1.6	諸に入り跡不明	
213	一括	錢貨	2.3	0.1	1.2	寛永通宝	

表5 鉄製品・鉄滓観察表

銘載番号	出土場所	器種	大きさ (cm)			重量 (g)	備考
			最大径	最大幅	最大厚		
27	SE1	不明	7.4	2.3	—	24.0	
28	SE1	不明	4.15	2.8	—	19.4	
29	SE1	釘	9.4	2.1	—	21.7	
30	SE1	釘	7.85	2.0	—	17.1	
31	SE1	釘	7.3	1.9	—	16.6	
43	鐵	不明	5.25	4.2	—	40.5	
44	鐵	釘	5.2	1.1	—	10.1	
45	鐵	釘	5.3	1.4	—	9.6	
46	鐵	不明	5.7	1.5	—	15.4	
148	SZ	鐵鑽	2.4	2.6	—	6.2	頭により鋸不明
149	SZ	釘	6.4	2.5	—	25.8	
150	SZ	釘	5.2	1.1	—	6.4	
151	SZ	釘	6.7	1.2	—	6.2	
152	SZ	不明	6.7	3.0	—	20.7	
153	SZ	不明	5.3	3.5	—	14.7	
200	B2ダリッド	刀子	2.4	2.6	—	6.2	一部欠損
32	SE1	鐵滓	6.0	4.0	—	40.5	
33	SE1	鐵滓	7.1	5.0	—	115.0	範型滓
34	SE1	鐵滓	8.9	6.1	—	157.0	範型滓
154	SZ	鐵滓	11.4	6.1	—	255.5	ガラス鐵滓、鉢材?
155	SZ	鐵滓	5.7	6.1	—	94.2	

表6 土製品、ガラス製品、その他

銘載番号	出土場所	分類	器種	保存率/部位	大きさ (cm)			調整・文様・胎土の特徴		色調		備考
					最大長	最大幅	最大厚	外面	内面	外面	内面	
20	SE1	土製品	土鉢	完形	—	—	—	黒褐色。にぶい赤褐色の粒を多くわずかに含む	—	10YR7/3 にぶい黄褐色	—	
53	SC3	須恵器	實?	破片	3.0	4.1	—	叩き目	叩き目	2.5YR6/2 灰黄褐色	2.5YR6/2 灰黄褐色	
54	SC3	土製品	人形	ほぼ完形	3.5	3.9	3.55	—	—	灰白	灰白	型押し
64	SC8	土鉢	輪型立?	一部	2.1	4.7	—	ナデ	ナデ	7.5YR6/6 橙	7.5YR6/6 橙	
146	SZ	ガラス	脊	一部	0.6	4.6	—	らせん状に輪形を施す	中央部に青い筋	10YR8/1 灰白	10YR8/1 灰白	
199	B2力 0006	塗付	ねじじ?	破片	2.3	0.6	—	—	—	10YR8/1 灰白	10YR8/1 灰白	
201	B2牛 0008	土製品	土鍤	ほぼ完形	0.9	3.1	2.58	—	—	2.5YR6/2 灰赤	2.5YR6/2 灰赤	
202	B2牛 0008	土製品	土鍤	ほぼ完形	0.9	3.8	2.58	—	—	2.5YR8/1 灰白	2.5YR8/1 灰白	
203	C2タ 0003	土製品	土鍤	ほぼ完形	1.0	4.3	3.2	—	—	7.5YR7/6 橙	—	
204	C2タ 0002	土製品	土鍤	ほぼ完形	1.0	3.1	3.3	—	—	2.5YR6/4 にぶい碧一 2.5YR6/3 にぶい碧一	—	

第IV章 自然科学分析

延岡城内遺跡出土遺物の金属学的調査報告

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

本報告では、近世の溝や落ち込みから出土した鉄滓について、性格や由来を検討するための成分分析を実施する。

1. 資料

資料は、SE1から出土した鉄滓2点(№1,2)と性格不明遺構(SZ)から出土した鉄滓?1点(№3)の合計3点である(表7)。いずれも化学組成分析と顕微鏡組織観察を実施する。

2. 分析方法

(1) 肉眼観察

遺物の外観上の観察所見を簡単に記載する。

(2) 顕微鏡組織

滓中に晶出する鉱物及び金属鉄部の調査を目的として、光学顕微鏡を用い観察を実施する。観察面は供試材を切り出した後、エメリー研磨紙の#150、#240、#320、#600、#1000、及びダイヤモンド粒子の3μと1μで順を追って研磨する。なお、金属鉄部の調査では、腐食(Etching)液に3%ナイタル(硝酸アルコール液)を用いる。

(3) 化学組成分析

供試材の分析は次の方法で実施する。

全鉄分(Total Fe)、金属鉄(Metallic Fe)、酸化第一鉄(FeO)：容量法。

炭素(C)、硫黄(S)、：燃焼容量法、燃焼赤外吸収法

二酸化硅素(SiO₂)、酸化アルミニウム(Al₂O₃)、酸化カルシウム(CaO)、酸化マグネシウム(MgO)、酸化カリウム(K₂O)、酸化ナトリウム(Na₂O)、酸化マンガン(MnO)、二酸化チタン(TiO₂)、酸化クロム(Cr₂O₃)、五酸化燐(P₂O₅)、バナジウム(V)、銅(Cu)、二酸化ジルコニウム(ZrO₂)：ICP(Inductively Coupled Plasma Emission Spectrometer)法(誘導結合プラズマ発光分光分析)。

表7 資料一覧と調査項目

分析番号	遺構名	遺物名称	年代	計測値		重量(g)	メタル度	調査項目	
				大きさ(mm)				顕微鏡組織	化学分析
No.1	SE01	鍛治滓	近世	74 × 46 × 38		115	なし	○	○
No.2	SE01	槌形鍛治滓	近世	89 × 63 × 44		157	なし	○	○
No.3	SZ(性格不明遺構)	ガラス質滓 (鉄材粘土付)	近世	108 × 65 × 56		254	なし	○	○

3.結果

(1)No.1 : SE1 鋼治滓

a)肉眼観察

115gの不定形の鋼治滓である。大きな破面ではなく、ほぼ完形と推定される。弱い着磁性があり茶褐色の鉄錆化物も散在するが、特殊金属探知機の反応はなく、まとまった鉄部は存在しない。滓の地の色調は暗灰色で、上面は比較的滑らかで緩やかな凹凸がみられる。側面は細かい木炭痕が著しい。

b)顕微鏡組織

顕微鏡組織を図25の写真2～4に示す。写真2の写真上側は鉄滓表面に固着した土砂である。土砂中にはごく薄手の微細な鉄錆化物（注1）が複数混在する。写真3はその拡大である。また図25の滓中白色粒状結晶ウスタイト（Wustite : FeO）、淡灰色柱状結晶ファヤライト（Fayalite : 2FeO·SiO₂）が晶出する。写真4は滓部の拡大で、鍛錆鋼治滓の晶癖といえる。

c)化学組成分析

分析結果を表8に示す。全鉄分（Total Fe）39.48%に対して、金属鉄（Metallic Fe）0.07%、酸化第1鉄（FeO）28.02%、酸化第2鉄（Fe₂O₃）25.21%の割合であった。造滓成分（SiO₂+Al₂O₃+CaO+MgO+K₂O+Na₂O）は37.88%と高値であるが、このうち塩基性成分（CaO+MgO）は4.47%とやや低めである。製鉄原料の砂鉄（含チタン鉄鉱）起源の二酸化チタン（TiO₂）は0.28%、バナジウム（V）0.01%と低値であった。酸化マンガン（MnO）0.12%、銅（Cu）も<0.01%と低値である。

当鉄滓は砂鉄起源の脈石成分（TiO₂、V、MnO）の影響がほとんどなく、鉄材を熱間で鍛打加工した時に生じた鍛錆鋼治滓に分類される。

(2)No.2 : SE1 鋼治滓

a)肉眼観察

ほぼ完形で157gの楕円形鋼治滓である。表面には広い範囲で黄褐色の土砂や茶褐色の鉄錆が付着する。弱い着磁性もあるが、特殊金属探知機での反応はなく、大きくまとった鉄部は存在しないと推測される。滓の地の色調は暗灰色で、上下面とも細かい木炭痕が散在する。表面の気孔は少ない。

b)顕微鏡組織

顕微鏡組織を図26の写真2に示す。中央下寄りの青白色部は錆化鉄で、過共析組織（C>0.77%）痕跡が残存する。この金属組織痕跡からは炭素含有量が1.5%程度の高炭素鋼と推測される。また周囲の暗灰色部は鋼治滓で、微細な白色樹枝状結晶ウスタイト（Wustite : FeO）、淡灰色柱状結晶ファヤライト（Fayalite : 2FeO·SiO₂）が晶出する。

c)化学組成分析

分析結果を表8に示す。全鉄分（Total Fe）44.79%に対して、金属鉄（Metallic Fe）0.10%、酸化第1鉄（FeO）35.71%、酸化第2鉄（Fe₂O₃）24.21%の割合であった。造滓成分（SiO₂+Al₂O₃+CaO+MgO+K₂O+Na₂O）33.84%と高めであるが、このうち塩基性成分（CaO+MgO）は4.03%と低めである。製鉄原料の砂鉄（含チタン鉄鉱）起源の二酸化チタン（TiO₂）0.23%、バナジウム（V）0.01%と低値であった。また酸化マンガン（MnO）も0.11%、銅（Cu）<0.01%と低値である。

当鉄滓も鋼治滓（No.1）と同様砂鉄起源の脈石成分（TiO₂、V、MnO）の影響がほとんどなく、鍛錆鋼治滓に分類される。また滓中には過共析組織痕跡の残る微細な錆化鉄部が確認された。高炭素鋼（刃

表8 化学組成分析結果

元素\試料		No.1	No.2	No.3
	SE01	SE01	SZ (性格不明確)	
	鏡治津	鏡型鏡治津	ガラス質津 (炉材粘土付)	
全鉄分	total Fe	39.48	44.79	11.50
金属鉄	Metallic Fe	0.07	0.10	0.10
酸化第1鉄	FeO	28.02	35.71	4.31
酸化第2鉄	Fe ₂ O ₃	25.21	24.21	11.51
二酸化珪素	SiO ₂	25.32	23.27	54.49
酸化アルミニウム	Al ₂ O ₃	5.39	4.14	14.42
酸化カルシウム	CaO	3.46	2.96	4.46
酸化マグネシウム	MgO	1.01	1.07	1.98
酸化カリウム	K ₂ O	2.04	1.92	3.41
酸化ナトリウム	Na ₂ O	0.66	0.48	2.33
酸化マンガン	MnO	0.12	0.11	0.21
二酸化チタン	TiO ₂	0.28	0.23	0.70
酸化クロム	Cr ₂ O ₃	0.02	0.03	0.04
硫黄	S	0.06	0.04	0.02
五酸化磷	P ₂ O ₅	0.32	0.30	0.38
炭素	C	0.42	0.24	0.09
バナジウム	V	0.01	0.01	0.01
銅	Cu	<0.01	<0.01	<0.01
二酸化ジルコニウム	ZrO ₂	0.01	0.02	0.02
造津成分		37.88	33.84	81.09
造津成分 Total Fe		0.959	0.756	7.051
TiO ₂ Total Fe		0.007	0.005	0.061

* 造津成分：二酸化珪素、酸化アルミニウム、酸化カルシウム、酸化マグネシウム、酸化カリウム、酸化ナトリウムの合計。

金)を熱間加工していた可能性が考えられる。

(3)No.3：落ちこみ ガラス質津(炉材粘土付着)

a)肉眼観察

大形の黒色ガラス質津である。1個所赤褐色の被熱粘土が固着しており、羽口先端部の可能性が考えられる。ただし送風孔の痕跡などは確認できないため、炉材(炉壁・羽口)のどの部分が断定することは難しい。被熱粘土部分は緻密な粘土質で、最大3mm程の砂粒を混和している。黒色ガラス質津部分は滑らかな流動状で、部分的に大形の気孔が散在している。当遺跡内から砂岩製羽口(内径2.6cm、外径12.6cm)や阿蘇溶結凝灰岩製羽口(内径3cm、外径14cm)が出土する。この羽口の固定粘土の溶融物の可能性もある。

b)顕微鏡組織

顕微鏡組織を図26の写真4に示す。黒色ガラス質津部分である。内部には炉材粘土中に混和されていた砂粒が点在している。また表層付近(写真下側)の微細な明白色粒は金属鉄、青灰色部は錆化鉄と推定される。

表9 調査結果

分析番号	遺構	遺物名称	顯微鏡組織	化学組成(%)							調査結果	
				Total Fe	Fe ₂ O ₃	塩基性成分	TiO ₂	V	MnO	ガラス質成分		
No.1	SE01	鍛治津	表面鍛造剥片着、 津部:W+F	39.48	25.21	4.47	0.28	0.01	0.12	37.88	<0.01	鍛鍊鍛治津
No.2	SE01	鍛治津	津部:W+F 鉄化鉄部:過共析組織痕跡	44.79	24.21	4.03	0.23	0.01	0.11	33.84	<0.01	鍛鍊鍛治津 (内部の鉄化鉄部はC:1.5%程度の高炭素鋼)
No.3	SZ	ガラス質津 (炉材粘土付)	ガラス質津、被熱砂粒点在 微小金属鉄・鉄化鉄散在	11.50	11.51	6.44	0.70	0.01	0.21	81.09	<0.01	炉材の加熱に用いられた炉の 部材破片(およびその溶融物)

c) 化学組成分析

分析結果を表2に示す。全鉄分(Total Fe)が11.50%と低値で、金属鉄(Metallic Fe) 0.10%、酸化第1鉄(FeO) 4.31%、酸化第2鉄(Fe₂O₃) 11.51%の割合であった。造津成分(SiO₂+Al₂O₃+CaO+MgO+K₂O+Na₂O)は81.09%と高値であるが、このうち塩基性成分(CaO+MgO)は6.44%と低めである。砂鉄(含チタン鉄鉱)起源の二酸化チタン(TiO₂)は0.70%と鍛治津(No.1, 2)より高めであるが、これは炉材粘土中の混入砂鉄の影響の可能性が高い。バナジウム(V)は0.01%、酸化マンガン(MnO) 0.21%、銅(Cu) <0.01%といずれも低値である。

当試料は炉材粘土などが溶融して生じた黒色ガラス質津と推定される。またガラス質津中にごく微細な金属鉄粒やその鉄化物が確認されたことから、金属鉄の加熱に用いた炉の部材と推測される。

4.まとめ

延岡城内遺跡から出土した鐵津2点・ガラス質津1点を調査した結果、周辺地域では鐵素材を熱間で鍛打加工して鍛造鉄器を製作していたことが明らかとなった。詳細を表9と以下に記す。

(1)今回調査を実施した鐵津2点(No.1, 2)はともに鍛鍊鍛治津に分類される。

さらに鍛治津(No.1)の表面には鍛造剥片が複数付着する。これは鐵素材を加熱した時に生じる表面の薄膜状の鉄酸化物が、鍛打によって剥離・飛散したものであり、熱間での鍛打加工を証明する微細遺物といえる。

また、楔形鍛治津(No.2)中には、過共析組織痕跡の残る微細な鉄化鉄部が確認された。硬さを要求される刃金原料に向いた高炭素鋼であり、当遺跡で熱間加工された鐵素材の性状を示唆するものといえる。

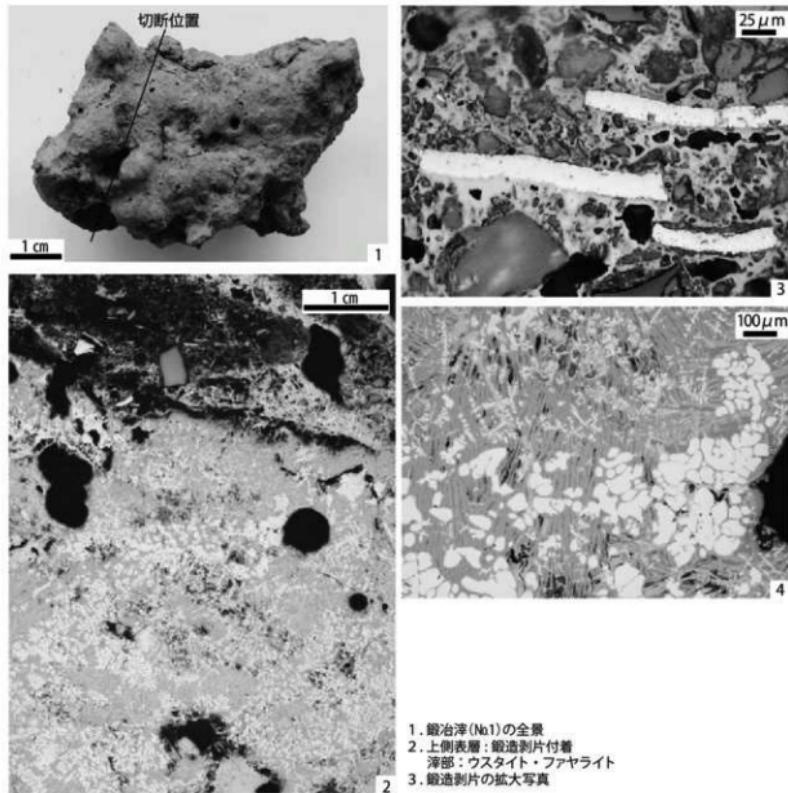
(2)黒色ガラス質津(No.3)は、一部炉材が残存する粘土溶融物で、内部に微細な金属鉄を含むことから、金属鉄の加熱に用いた炉の部材と推測される。調査地区内から上述したような鍛鍊鍛治津が出土しているため、鍛治津の一部(およびその溶融物)の可能性があるが、鍛治関連遺物としては相当大型のガラス質津である点が懸念される。近世～近代の新しい時期の遺物のためとも考えられるが、現時点では他の可能性(石製羽口固定粘土溶融物)も考慮する必要があろう。

註

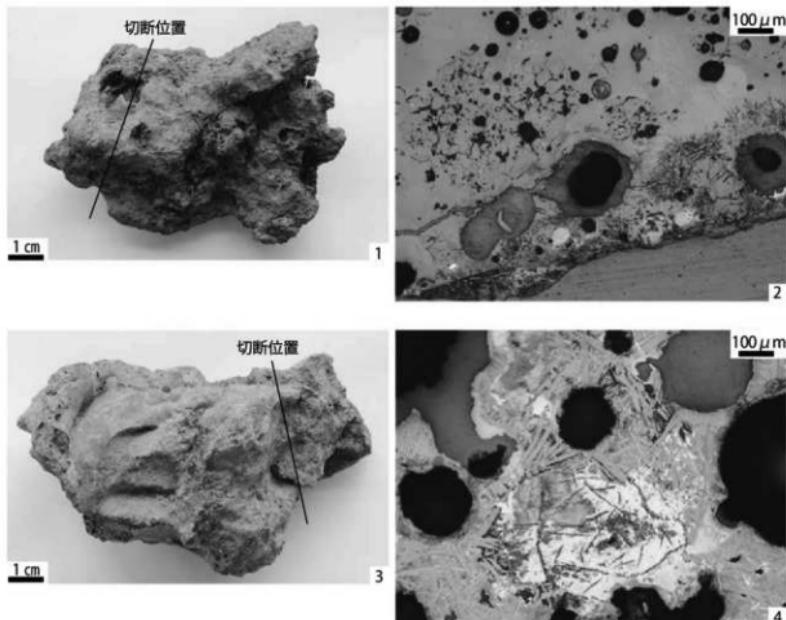
- (1) 鍛造剥片とは鐵素材を大気中で加熱、鍛打したとき、表面酸化膜が剥離、飛散したものを指す。俗に鉄肌(金属肌)やスケールとも呼ばれる。鍛治工程の進行により、色調は黒褐色から青味を帯びた銀色(光沢を発する)へと変化する。粒状津の後続派生物で、鍛打作業の実証と、鍛治の段階を抑える上で重要な遺物となる。

鍛造剥片の酸化膜相は、外層は微厚のヘマタイト（Hematite : Fe₂O₃）、中間層マグнетイト（Magnetite : Fe₃O₄）、大部分は内層ウスタイト（Wüstite : FeO）の3層から構成される。

鍛造剥片を王水（塩酸3 : 硝酸1）で腐食すると、外層ヘマタイト（Hematite : Fe₂O₃）は腐食しても侵されず、中間層マグネットイト（Magnetite : Fe₃O₄）は黄変する。内層のウスタイト（Wüstite : FeO）は黒変する。鍛打作業前半段階では内層ウスタイト（Wüstite : FeO）が粒状化を呈し、鍛打仕上げになると非晶出化する。鍛打作業工程との段階が行われていたか推定する手がかりともなる。また鍛造剥片の遺構内の分布状態から作業空間の手掛りを得ることができる。



第25図 鍛治溝(No 1)の全景と顕微鏡組織



1. 楔型鋳冶滓 (No.2) の全景
2. 楔型鋳冶滓 (No.2) の滓部: ウスタタイト・ファヤライト、鉄化鉄部: 過共析組織痕跡
3. ガラス質滓 (No.3) の全景
4. ガラス質滓 (炉材粘土付) (No.3) の素地ガラス質滓、暗色粒:被熟砂粒、微少明白色粒:金属鉄、青灰色粒:鉄化鉄

第26図 楠形鋳冶滓 (No.2)・ガラス質滓 (No.3) の全景と顕微鏡組織

第V章 総括

今回の調査では、近世から近代にかけての溝状遺構、歓状遺構、土坑、柱穴、落ち込みを検出した。ここでは、検出遺構、出土遺物について検討をおこない、調査の成果と現存する絵図等を合わせて延岡城内遺跡の土地利用の変遷を追っていきたい。

遺構について

調査区北側より溝状遺構、調査区南側で歓状遺構を検出し、土坑、柱穴は調査区全体より検出した。さらに調査区中央に落ち込みがあることを確認した。遺構同士は隣接し、溝状遺構、落ち込みより出土した陶磁器の接合、4号土坑、落ち込みより出土した土師質土器の接合をすることができた。出土した遺物の時期から見ても、検出した遺構に大きな時期差はないことが考えられる。また、2号土坑、3号土坑、柱穴は遺構を伴わないが、掘り込み面を見る限り、他の遺構と大きな時期差はないと考えられる。調査区中央で確認した落ち込みは、出土遺物も多く、器種も豊富で、図化をおこなっていないが、獸骨の小片も出土している。出土遺物は埋土中に散在していることから、廃棄土坑として利用されていた可能性が考えられる。

遺物について

当調査区からは、17世紀から19世紀にかけての陶磁器類が出土したほか、鉄滓、羽口、弥生土器、須恵器などが出土している。弥生土器は数点の小片が出土しているが、摩耗が激しく、部位や器種が不明である。須恵器は5号土坑から出土しているが、摩耗が激しく小片のため、弥生土器と同じく器種や部位については不明である。5号土坑出土の須恵器は、底面付近からの出土だが、小片1点のみの出土であることから、弥生土器と同様に、周辺からの流れ込みの可能性が高い。出土した国産陶磁器類は17世紀から19世紀にかけて生産されたものが多く、肥前系、薩摩焼、萩焼、瀬戸美濃系、備前焼、関西系等といった産地も豊富だが、肥前系の陶磁器類が多く見られる。

その他、当調査区からは多量の鉄滓が出土している。出土した鉄滓は溝状遺構、落ち込みから出土しているが、多くは溝状遺構からの出土で、埋土中に散在している状態であった。鉄滓は楕形滓が多く見



第27図 有馬氏時代の調査区周辺
(明治大学所蔵、延岡市内藤記念館出典)



第28図 三浦氏時代の調査区周辺
(岡山県立記録資料館所蔵、延岡市内藤記念館出典)

られ、中にはガラス質の滓が見られた。これらの内一部の自然科学分析をおこなったところ、鍛造鉄滓、炉材の可能性があるという結果が出ている。詳細は第IV章に記載しているが、当調査区からは鍛冶関連の遺構は確認できなかったが、周辺で鍛冶をおこなっていた可能性が高い。

鉄滓の他、鍛冶をおこなっていた可能性を示すものとして、石製羽口が出土している。石製羽口は砂岩製と凝灰岩製の2点が出土しているが、全て溝状遺構から出土している。いずれも約1/2が欠損し、内外面に被熱を受けた痕跡が見られる。石製羽口は稲葉崎宮田遺跡（延岡市）、富高王子谷遺跡（日向市）、和田遺跡（都城市）でも見られる。²¹⁾

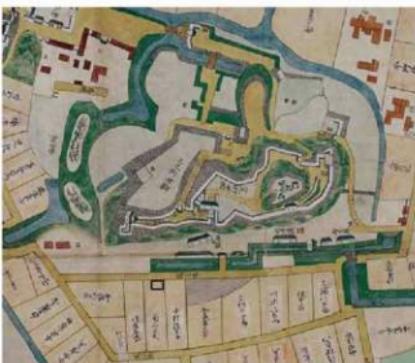
石製羽口は宮崎県内だけではなく、小倉城跡（福岡県）、鶴崎遺跡群、下郡遺跡群第106次、第117次、中世大友府内町跡第14次（大分県）や蓮花寺跡、相良頼景館跡、宇土城跡、西岡台遺跡、無田原遺跡（熊本県）等でみられる。²²⁾ 管見ではあるが、一部安山岩製羽口が見られるものの、石製羽口の多くは凝灰岩製、砂岩製が多く、今回の調査で出土した石製羽口と石材に大きな違いはない。²³⁾ こうした石製羽口の使用された時代について、多くは中世末から近世初頭に属している。当遺跡は近世から近代にかけての性格を持っているが、溝状遺構に鉄滓が散在している状況や、鍛冶炉等が今回の調査で確認できていないことから、石製羽口が明確に近世の遺物であるとは言い難く、当遺跡内で、古い時期の遺構が切られているか、溝状遺構に流れ込んだ可能性が考えられる。

延岡城内遺跡の変遷

第27図から第31図は現存する延岡城下絵図である。第27図は有馬氏時代の調査区周辺である。有馬氏は慶長19（1614）年から元禄5（1692）年にかけて延岡藩で藩政をおこなっ



第29図 牧野氏時代の調査区周辺
(笠間船荷神社所蔵、延岡市内藤記念館出典)



第30図 内藤氏時代の調査区周辺
(明治大学所蔵、延岡市内藤記念館出典)



第31図 明治維新前後の調査区周辺
(明治大学所蔵、延岡市内藤記念館出典)

ている。絵図には四角で調査区があったと考えられる場所を示しているが、絵図を見ると、居住空間であることがわかる。第28図の三浦氏時代になると、調査区周辺は空き地となっていたようである。続く牧野氏の時代にも調査区周辺は空き地となり、内藤氏から明治維新前後になると、また居住空間となっている。遺物の出土状況も、当調査区が空き地となる17世紀の遺物の出土はあまり見られず、18世紀から19世紀にかけての遺物の出土量が最も多い。絵図と出土遺物から見て、当調査区は有馬氏時代から明治時代に入るまでに、居住空間としての利用と空き地を繰り返している。しかしながら、検出した畝状遺構、溝状遺構から、屋敷本体は当調査区よりもさらに南にあった可能性が考えられる。

また、遺構検出面より下層になると、河川堆積と考えられる砂質層、礫層となることから、さらに前時代には当調査区まで河川が広がっていた可能性が考えられる。

終わりに

延岡城内遺跡は近世延岡藩藩士の屋敷地と考えられる。しかしながら、多量の鉄滓と石製羽口等、日常生活とは異なる遺物の出土から、当該地の土地利用については今後さらなる検討が必要である。今回調査をおこなったことにより、屋敷地として利用される以前の当該地の様相の一端をつかむことができたのは大きな成果といえる。これらを踏まえ、今後の課題としたい。

註1) 石川恒太郎『日本古代の銅鉄の精錬遺跡に関する研究』1959より

註2) 宇土城跡 西岡台遺跡 無田原遺跡・熊本県教育委員会『生産遺跡基本調査報告書I - 製塩遺跡・製鉄遺跡・石器製作所-』1797より

註3) 延岡市篠葉崎宮田遺跡に関して、石川恒太郎著『日本古代の銅鉄の精錬遺跡に関する研究』の中で「石製輪羽口」とだけ記載してあるため、宮田遺跡出土の羽口の石材は不明である。

註4) 註2)と同

《引用・参考文献》

延岡市編さん委員会『延岡市史』1993

石川恒太郎『日本古代の銅鉄の精錬遺跡に関する研究』1959 角川書店

大分市教育委員会『大友府内6-1中世大友府内町跡第14次発掘調査報告書一』2003

『府内城・城下町跡』第12次調査報告書 旧米屋町における共同住宅建設に伴う埋蔵文化財発掘調査 2003

『鶴崎町遺跡群(三軒町)』大分市埋蔵文化財調査報告書第58集 2005

『下郡遺跡群Ⅲ』大分市埋蔵文化財調査報告書第61集 2005

『下郡遺跡群V』大分市埋蔵文化財発掘調査報告書第76集 2007

北九州市教育文化事業団埋蔵文化財調査室『小倉城2』北九州市埋蔵文化財調査報告書第196集 1997

熊本県教育委員会『蓮華寺跡・相良頼景館跡』熊本県文化財調査報告第22集 1977

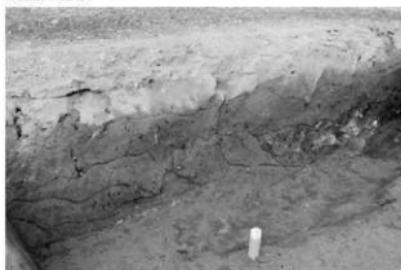
『生産遺跡基本調査報告書I - 製塩遺跡・製鉄遺跡・石器製作所-』熊本県文化財調査報告第38集 1979

宮崎県埋蔵文化財センター『野地久保島遺跡 森ノ上遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第196集 2011

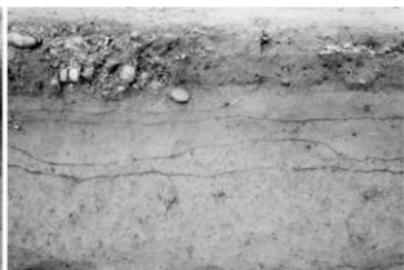
写 真 図 版



調査区全景



調査区北側土層堆積状況（西北より）



調査区東側土層堆積状況（西より）



疊層の広がり（西より）



包含層出土遺物

図版2



溝状遺構検出状況（西より）



溝状遺構堆積状況（西より）



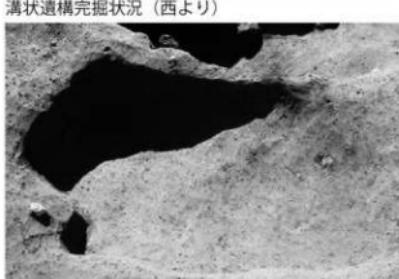
溝状遺構出土状況（北より）



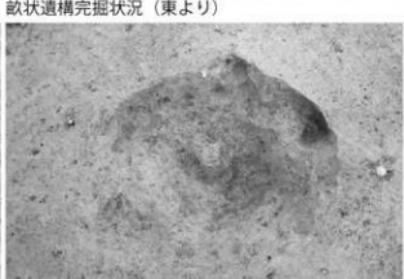
溝状遺構完掘状況（西より）



竪状遺構完掘状況（東より）



1号土坑完掘状況（北より）



2号土坑完掘状況（北より）



3号土坑完掘状況（西より）



4号土坑検出状況（西より）



5号土坑完掘状況（西より）



6号土坑検出状況（西より）



落ち込み土層堆積状況（北西より）



落ち込み遺物出土状況（西より）

図版4



出土遺物①



出土遺物②

図版6



出土遺物③

図版 7



出土遺物④

図版8



出土遺物⑤ (214～220 実測図未掲載資料)

報告書抄録

ふりがな	のべおかじょうないいせき							
書名	延岡城内遺跡							
副書名	延岡拘置支所新営工事に伴う発掘調査報告書							
シリーズ名	宮崎県埋蔵文化財センター埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ番号	第217集							
編著者名	太田 真理子							
発行機関	宮崎県埋蔵文化財センター							
所在地	〒880-0212 宮崎県宮崎市佐土原町下那珂 4019番地 TEL 0985-36-1171							
発行年月日	西暦 2012年 3月 23日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
のべおかじょうないいせき 延岡城内遺跡	みやざきけんのべおかじょうないいせき 宮崎県延岡市 さくこうじ 桜小路	45203	3018	32度 57分 36秒 付近	131度 66分 41秒 付近	2010.10.18 ～ 2010.12.22	約200m ²	延岡拘置支所新営工事に伴う記録保存調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
延岡城内遺跡	集落	近世 ～ 近代	溝状遺構 敵状遺構 土坑 柱穴	1条 8条 6基 9基	陶磁器 土師器 瓦質土器 瓦 石製品 銅製品 鉄製品 鉄滓			
要	約	今回の調査では、溝状遺構1条、敵状遺構8条、土坑6基、柱穴9基を検出した。その他、調査区の中央に落ち込みが見られ、多量の陶磁器類が出土した。溝状遺構からは、石製の羽口が出土し、約14.0kg（合計）の鉄滓が出土した。鍛冶炉等は今回検出に至らなかったものの、多量の鉄滓と羽口の出土により当該地周辺で鍛冶がおこなわれていた可能性を導き出すことができた。また、敵状遺構の検出により近世延岡藩家臣の屋敷の敷地として利用されていたことが考えられ、土地利用の変遷を見るうえで重要な手がかりとなる。さらに下の層になると礫層が調査区中央から南にかけて広がっていた。この礫層は河川の堆積によるものと考えられ、屋敷地として利用される以前の様相を明らかにすることができた。調査区内からは17cから19cにかけての豊富な種類の遺物が出土し、近世延岡藩家臣の生活の一端が明らかとなった。						

宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 第217集

延岡城内遺跡

延岡拘置支所新営工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2012年3月

発 行 宮崎県埋蔵文化財センター

〒880-0212 宮崎市佐土原町大字下那珂4019番地

TEL 0985(36)1171 FAX 0985(72)0660

印 刷 秀巧社印刷株式会社
